

◎天皇は賢主にましました。天皇は實に古今の賢主にましましたので、御骨相も常人に異らせ給ふたと見え歴代御即位に冠らせ給ふ應神天皇の王冠は此の天皇の御頭にのみよく合つたといふことである。

五、藤原氏其實權を失ふ 舊弊大に改まり皇威再び振ひ、天皇御親裁し給ひ、教通關白も唯員に備はるにすぎず、父頼通は宇治に退院し、次に天皇は讓位後も院中にありて政を聽かんとし給ひしかば、自然藤原氏は名ありて實なきが如く、遂に實權を失ふに至つた。

六、天皇の崩御 天皇在位僅かに五年にして延久四年十二月位を御子白河天皇に讓り、尙院中にありて後見し政を聽給はんとの思召ありしも、翌延久五年五月御年四十で崩御あらせられしかば十分に其御志を遂げ給ふことが出来なかつた。天皇の崩じ給ふや藤原頼通すら崩御の訃音を聞き食を止め箸を投じて嘆息し「邦家の不幸はより大なるものなし」と言つた。一條天皇の中宮たる藤原の彰子も(道長の長女上

東門院)猶御存命なりしも悲嘆して壽長ふして悲しむこと多きをかこたれた。と、蓋し天皇の政をなし給ふ事々皆至公至誠に出づるを以て、藤原氏の如きも敢て自ら恣にすること能はず。却て聖旨を感佩するに至つたのである。聖徳の人を感せしむることそれ斯くの如くである。

□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (1)後三條天皇と藤原氏との關係は何うであつたか。(2)天皇の御性質は何うであつたか。(3)天皇の御政治に就いて語れ。(4)藤原氏の勢力は此の時は何うであつたか。……後三條天皇の崩御さるゝや頼通は何といつたか。(5)之より皇威は何うなるだらうか。

### 第二時 白河法皇の院政

□目的 白河天皇、後三條天皇の御遺志を繼ぎて親裁せられたが、御讓位の後も院中に政を聽かるること四十餘年、遂に能く藤原氏の專權を制せられたこと及院政の弊害に就て授けるのである。

□方法、豫備 (1)藤原氏の威權は如何にして衰ふる様になつたか。(2)後三條天皇の御政事に就て語れ。(3)目的指示。

□教授 一、院政

(1)白河天皇御父帝の御遺志を継ぎ給ふ。天皇は性剛毅果斷で先帝の風があつた。御即位の後は政治を親裁せられた。

(2)院政の始め。白河天皇は位を堀河天皇(七十三代)に譲りて上皇となられた後、院中にありて政を聽かれた、是即後三條天皇の御意志である。後三條天皇は、

「歴朝の天子位を讓れば政務に預らずして幼主を攝關に託し幼主成長の後と雖も政は權門より出づ王權の衰ふる一に之に由る、其れ父譲りて子受くる時一家の輕き猶其の父の棄て、顧みざることあらず、況や天子の重きに於てをや、朕は讓位の後と雖も政を聽き永く以て例となさば權臣專横の弊之より改らん」と。

然るに天皇は御讓位後間もなく崩御せられたので、白河法皇が其の御遺志を御實行されたのである。

(3)藤原氏の威權愈衰ふ。白河上皇は佛法を信せられ薙髮して法皇と稱せられた、

其の院政は堀河<sup>七十</sup>三代鳥羽<sup>七十</sup>四代崇徳<sup>七十</sup>五代の御三代四十三年間に涉り、天下の事は總べて御心のまゝに計らはれたので、藤原氏の威權愈衰へた。

(4)院政の利弊。院政とは上皇若しくは法皇が、院中にて政を聽かるゝので其の政務を執らるる所を院廳と云ひ院の令を院宣と云ひて其の權は詔勅よりも重かつた、されば藤原氏の勢力を殺ぐには効果があつたが、政治の中心二ヶ所ありて政令二途に出づることとなり此に其の弊を生じたのである。殊に法皇は御隱居の御身分故自然御意の儘の事も出來、内寵により次の天皇を定むるに當り公平を缺くことと生じた。彼の保元<sup>元</sup>の亂の如きも其の因は此にある。白河法皇の後は鳥羽上皇之に代り院政前後二十八年に及んだ。院政の止んだのは光格天皇の御讓位後仙洞にありて政を聽くこと二十三年、同院の崩御の時からである。

二、白河法皇晩年の御政治

(1)法皇の驕奢。法皇は佛を崇び其の御在世中は佛事法會大半を占め、六勝寺(法

勝寺、尊勝寺、圓勝寺、最勝寺、成勝寺、延勝寺、内二寺は鳥羽帝の建立)の建立を始めとして土木工事を頻りに起された。法皇又御遊幸を好ませられ高野に四度熊野に八度幸せられたが此の如きことは御歴代中絶無である、京師近郷の御遊幸も中々多かつた。

(2) 國用乏しく政治復漸く紊れた後三條天皇の御盛業が今三代繼續せらるれば古の盛大に復するを得しに、遂に白河法皇に至りて、漸く衰へしは實に惜しいことである。

□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (1) 白河法皇の院政を開かれたのは何故か。(2) 院政の利弊に就いて語れ……藤原氏の状況は如何であつたか。(3) 法皇の院政中の弊政は何か。

### 第三時 僧兵、全課概括

□目的 朝廷深く佛教を信せられた爲め、諸大寺の勢力強大となり更に僧兵の横暴と

なる、朝廷之を鎮定せんとして武士をして京都を守衛せしめられた結果、源平二氏の興起するに至りし次第を授けるのである。

□方法、豫備 (1) 前時間の復習。(2) 目的指示。

□教授 一、僧兵の起り

(1) 諸大寺の富強 佛教の盛なるに従ひ、皇室を始め公卿等の田園を寺院に寄附する者多く、寺領の莊園増加し富強を極めた。

(2) 僧兵 中央政府の威權が失はれ、地方制度の紊亂から諸大寺は他寺院及豪族より自己の領地を保護するが爲に兵を置かねばならぬ。當時地方官の誅求がはげしいから、良民でも逃亡して寺に入り、頭を圓めて租税を脱れるの徒多く、諸大寺には其數數千に上つた。寺では之を大衆と呼び、是等は佛法保護の名の下に武藝を練習して遂に僧兵となつたのである。

### 二、僧兵の横暴

(1)延暦寺、興福寺、圓城寺等の暴狀は是れ等の諸大寺は各數千の僧兵を蓄へてゐた。其の弊害は益、多く院政の頃殆ど其の極に達した、當時朝廷の駕御其の宜しきを



本圖に示せるは僧兵の特装にしてこれを裏頭(ウラトウ)といふ装束を以て頭を裹むの謂なり上には黒麻綴子(モザ)の裏絹(ソケン)僧服の名を著下には履卷(クマカマ)を着き葛布(クズバカマ)を穿ち草包の太刀を脇に差し帖紙(マヤリ)及び中啓(チユウケイ)を懐にして鎌刀を持つ

満のことがあれば、山法師(延暦寺の僧徒)は日吉の神輿を、興福寺の僧徒は春日の神木を奉じて京師に亂入して、朝廷に強訴してゐた。當時敬神思想の熾なる時に於て日吉、春日の神輿、神木に對しては朝廷は如何ともすることが出来なかつた。

◎挿畫 僧兵神輿を奉じて入京する圖、之は延暦寺の僧侶が日吉山王の神輿を擁して宮闕に強訴せんとす

る所、もし之に抗する者あれば神敵佛敵と稱するので、武士も之が防禦の任に當るを憚るので僧兵の跋扈は益々甚しかつた、圖中甲冑あり、又其の上に僧衣を着けたるあり、頭を裹みしものは袈裟である元防塞より來るもので裏頭と云ふ、武器は多く長刀である。長刀は僧侶の最も長ぜるものである。

(4)白河法皇の御嘆息 天下に朕の意の如くならざるは唯賀茂川の水と雙六の采と山法師とのみ」と。

### 三、僧兵横暴の影響

僧兵暴行を恣にするに當りては朝廷武士をして之を鎮定せしめ、又京都を守衛せしめられた。是源平二氏が次第に京都に勢力を得て遂に天下の政權を掌握するに至れる一原因である。

### 口整理

- 一、教科書の讀解。
- 二、質疑應答。
- 三、設問 (1)僧兵は何うして起つたか (2)僧兵の暴狀を語れ。 (3)地方の武士が次第に勢力を京都に占むる様になつたのは何故か。 (4)全課の概括。

## 第十四 源平二氏の盛衰 (三時間)

□要旨 藤原氏の世と院政の世とに於ける源平二氏の勢力の消長を關係的に授け、政權武門に移り行く経過を明らかならしめんとするのである。

### □教授上の注意

一、保元平治の亂の戦闘に就ては尋常五年に於て精しく授けたるものなれば茲では復習的に授け、主として源平二氏の勢力の消長事變の原因、結果等に重きを置き、なるべく概括的に教授するを要する、但し此の時代の戦は幾度聞いても血湧き肉躍るの感ある所なれば、讀本等と連絡して復習的にもせよ一度は活寫する必要はある。二、重盛は平氏一門の柱石にして平氏は彼ありて盛になり、彼死して忽ち衰亡の端を開きしことに留意せしめる。三、横暴なりし清盛、忠誠なりし重盛、此の父子性格を對照して各方面より推究せしむべく興味ある所である。四、武士が隆盛を致したる所以、源氏の不振の因、平氏の盛なる理、及其の衰亡の原因等を推究批判せしめ、榮枯盛衰は世の習ひとはいへ必ずや此に因果あることを歸納せしめる。五、源氏の蜂起せし所以は、先祖の東國地方に勢力を植ゑつけ置きしことを回想せしめて十分了解せしめる。

□教材區分 第一時、源氏の隆盛、平氏の隆盛の一部(平治の亂まで)。第二時、平氏

の隆盛の残り、清盛の横暴。第三時、源氏の擧兵。第四時、復習。

□教具 源氏及平氏の略系、清盛の肖像、近畿地方地圖。

### 第一時 源氏の隆盛、平氏の隆盛の一部(平治の亂まで)

□目的 源氏は經基以來代々武勇の者出で勢力があつたが、保元平治の二亂により、源氏衰へ平氏は之に代りて勢力を得た次第を授けるのである。

□方法、豫備 (1)武士は如何にして起つたか。(2)武士が地方で勢力を得る様になつたのは何うした時か(天慶の亂等)。武士が京都で勢力を得る様になつたのは何故か。之等の武士中最も勢力ありしは誰か。(5)目的指示。

### □教授 一、源氏の隆盛

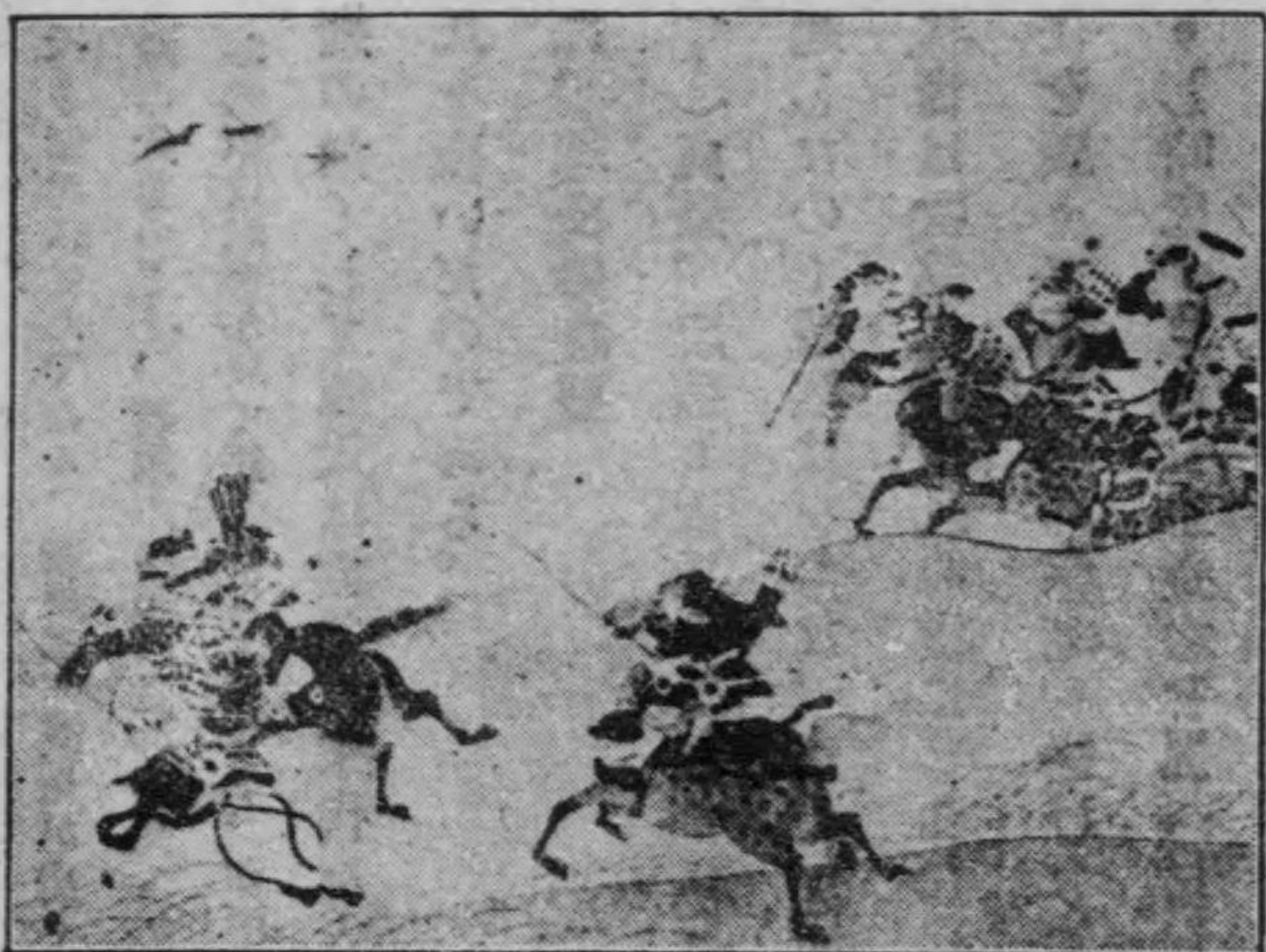
(1)經基、滿仲、賴光、賴信 天慶の亂後武士の勢力は益々強くなつたが、中にも源氏には代々武勇の人が出でて藤原氏に信賴せられ、屢、諸國の亂を平げて大に其の名を轟かした。即經基は藤原純友の亂を平げて武名を馳せ、其の子滿仲は冷泉以

下三朝に仕へ、人となり勇略あり且和歌を善くしたから王公以下皆之を尊重し。満仲の子頼光は大江山の山賊酒巖童子を部下の四天王(源綱、平貞道、平季武、坂田公時)と共に平定し、其の弟頼信は剛果明決、彼の三年の間平がざりし平忠常を常陸に攻めて一戦もせずして之を降した。

(2)頼義、義家 頼信の子頼義は沈毅にて雄略、射術に長じた。相模守となりて行くや威風大に行はれ、源氏は大に東國に勢力の基礎を固めた、其の子義家亦射術に長じ驍勇絶倫天晴れ文武の名將であつた。年七歳石清水八幡で元服したので八幡太郎と稱した、父と共に前九年の役及後三年の役を平定して功勞があつた。

□前九年役は元千七百年代の初頃に起つたもので安倍頼時父子の反である、頼時は陸奥の人で浮囚の長として勢力があつたが頼時に至つて勢強大となり門を衣川に設けて其地方を領有し良民を劫略し、暴威を振ひて貴族を納めず國守も之を如何ともする事が出来なかつたので、朝廷頼義を陸奥守に任じ次で鎮守府將軍として之を討たしめられた、偶々頼時部下の將(安倍富忠)兵を起して官軍に屈し頼時を亡したが、子貞任宗任容易に屈せなかつた。頼義は出羽仙北の浮囚の長清原武則と共に衣川、鳥海の二橋を抜き、遂に尉川橋

を攻めて貞任を殺し宗任を降したのである、之を前九年の役といふのであるが事實は十二年かかつてゐる。



後三年合戦の圖

(部一の繪巻合戦後三年後筆久惟守驛飛傳 藏氏傳仲田池原侯)

皇天上村後は巻繪のこ。すらなか詳は傳の久惟守驛飛  
便に學教のま見が徒僧の寺曆延に(七〇〇二)年二平正  
。りなのもるたせか畫にめたんせ  
す亂な行の流飛り當にるむ攻を振澤金が家義は圖のこ  
蘇有しせに壁をれこてち撃り覺なるあ兵伏の敵て見を  
。す示を

□後三年の役は清原氏一族の争の爲に起つたものである、さきに清原武則は勳功頗る多かつたから安倍氏に代りて勢力を奥羽地方に得た、武則の子武貞、武衡あり武貞の子武衡は父について勢力を得他を從屬の如くするので其の弟家衡及武貞の義子清衡が之を討たんとした、陸奥守義家、眞衡を助けて武衡家衡を討つた(清衡は後義家に屈した)。義家は奥羽の豪族藤原清衡と力を協せて奥羽地方を平けたが是れも實は五ヶ年を要してゐ

るのである。之より奥羽地方では藤原氏と清原氏に代ること、なつた、此の戦亂は實に古武士の面目を認ぶべき話題に富んでゐる、新羅三郎義光が東下援助したことや、義家が勇健の座を設けたこと、鎌倉権五郎景政の武勇のこと、義家の飛雁の亂れを見て伏兵を知つたこと、朝議が義家の私闘となして其功を賞せざりしを義家は私財を以て將士を賞したこと、勿來の關で「吹く風を」の歌を詠じたことなどである。

斯の如くして源氏は經基以來代々人傑が出たので、大に其の隆盛を來たし遙かに平氏を凌いだのである。

## 二、平氏の隆盛

(1) 貞盛、忠盛 源氏の盛なるに反し、平氏にありては嚮に將門叛し後に忠常亂を起したので威望はをちた、貞盛が將門を平げて大功を立てしより一時振ひしも其の後裔は次第に顯はれぬ様になつた、貞盛六世の孫忠盛に至り白河、鳥羽兩法皇の信任を蒙りて再び其の家名を揚げた。忠盛は膽勇あり、白河法皇に従ひて祇園社に至りし時鬼が見えた忠盛之を捉へたるに老法師が麥藁を被り火器を擁して行く所であつた、又忠盛が昇殿を許された時朝臣之を猜忌し暗に乗じて之を殺さんとした、忠

盛木刀に銀紙をはりて打振りて威嚇したことがある(昇殿佩刀を許さず)、又武功として山陽、南海二道の海賊を捕へて功を建てた。

(2) 保元の亂 忠盛の子清盛の時源平全く地をかへた。保元の亂は即ち其の因である、崇徳天皇五代は御父鳥羽法皇の御意志により、心ならずも近衛天皇六代に御讓位せられたが、天皇崩御後は上皇の御子重仁親王の御即位か御自身御重祚かの御志であつたが、近衛天皇の母美福門院の爲さへざられ御弟後白河天皇七代御即位せられた爲此に於て上皇御憤り遊ばされた。藤原氏に於ても忠通(關白)弟頼長と不和を生じた。保元元年(一一八六)頼長は上皇に勸め奉りて兵を募る、かくて白河殿(上皇方)に集る者頼長を始めとして源爲義、爲朝、平忠正、高松殿(天皇方)に集る者は忠通、源義朝、平清盛等であつた。爲朝は爲義の第八子鎮西八郎と稱し身長七尺、猿臂にして力人に勝れ左手長きこと四寸五人張りの大弓を引く、十三歳より九州を從へてゐたが此の時東上し上皇方に馳せ參じ、夜攻めを建策したが頼長の爲に用ゐ

られず、遂に兄義朝等の夜攻に遇ひ上皇方は大敗したのである、上皇は讃岐に流され給ひ、爲義及其の子數人は斬られ、爲朝は伊豆大島に流されて後自殺した。此の亂では源氏の有力なる人々多く失はれ遂に衰微の端を開いたのである。



(藏院法妙都京)皇法河白後

(3)平治の亂は保元の亂に源氏の勢力の一半を失ひ、清盛の勢益々盛であつたので義朝の不平は絶えなかつた。此に藤原信賴は近衛大將たらんとして藤原信西に妨げられたので信西と不和になつてゐたが義朝も亦其の女の爲に信西の子を婿とせんとして断られ信西と不和になつた。遂に義朝信賴同盟して

清盛の熊野詣でを機とし兵を挙げ、後白河上皇及二條天皇を宮城に幽し奉り信西を殺した、然るに清盛及子重盛歸り之れを待賢・郁芳・陽明の諸門に攻め結局之を破つた、待賢門の義平と重盛との戦は最も勇壯であつた。義朝は尾張に至り家臣長田忠致に頼つたが遂に之に殺され、義平も後捕へられて斬られ、頼朝は伊豆の蛭子ヶ島に牛若丸は鞍馬寺にやられ、此に於て、さしも盛であつた源氏も全く衰へ平氏は勢盛になり遂に藤原氏を壓する様になつた。

□整理 一、質疑應答。二、教科書の讀解。三、設問 (1)源氏の隆盛を來したるは何故か。(2)源平盛衰地をかへる様になつたのは何故か。(3)源氏は如何にしたら其の勢力を維持することが出來たのであるか(一族の和合)。(4)之より平氏の勢は何うなるだらうか。

第二時 平氏の隆盛の残り(五一頁の九行より)清盛の横暴

□目的 平治の亂後平氏の勢其の極に達し、清盛は遂に藤原氏の例に倣ひて皇室の外



戚となる。而も清盛は横暴を極め法皇をさへ幽し奉るに至りし次第を授けるのである。

□方法、豫備 (1)前時分の復習。(2)目的指示。

□教授 一、平氏の隆盛

(1)清盛の累進 平治の亂後清盛は從三位に叙せられ、武士の公卿に列するの例を開き、仁安二年(一一八二六)には左右大臣を経ずして從一位太政大臣に昇り、隨身兵仗を賜はり且つ輦車にて宮中に出入するを許された。翌年薙髮して淨海と稱し別莊を攝津福原に興した、官を辭した後も權勢を恣にし後白河法皇は政を聽かれてゐたが、院政は名のみで攝關も唯員に備はるに過ぎず。

(2)一族の昇進 重盛は内大臣左近衛大將、二男宗盛は後、内大臣右近衛大將、三男知盛は從二位權中納言、四男重衡は正三位左近衛中將、孫維盛其弟資盛は各從三位左近衛權中將となる。一族公卿十六人一門の莊園五百餘ヶ所其の領國五百餘國に

跨りて天下の半を過ぎ、被服等頗る華麗を極めた。されば清盛の妻の兄(平時忠)は「平氏に非ざる者は人に非ず」とさへいつてゐた。

(3)外戚となる 清盛は遂に藤原氏に倣て皇室の外戚とならんとした。其の妻の姪滋子は後白河法皇の女御となりて憲仁親王を生み奉つた。仁安二年親王は六條天皇の皇太子とられた。時に天皇は三歳皇太子は六歳、而も皇太子は天皇の御叔父に當らせられるのである。天皇は八歳にして高倉天皇(八十代)に御讓位せられて上皇とられた。清盛は其の女徳子を高倉天皇の中宮とし、己乃ち外戚となるに至つたのである。

## 二、清盛の横暴

(1)鹿谷の密會 後白河法皇の近臣藤原成親は、清盛の威權盛にして横暴の行多くなるに及び、僧西光、俊寛と共に俊寛の鹿谷の山莊に會して平氏を滅さんと謀つたが謀漏れ、西光、成親は斬られ俊寛は鬼界ヶ島に流された。

(2) 重盛の忠孝 成親等の謀に法皇も御關係ありとて、清盛兵を率ひて法皇を幽し奉らんとしたが、子重盛忠孝の志厚く父の横暴を憂へて之を諫めた事も多かつたの



清盛及及び重盛筆

で聊か謹む所があつた。然るに重盛は四十二歳で薨じたので其の後は誰も諫むる者がなかつた爲其の横暴益甚しくなつた。重盛は眞に平門の柱石で實に平氏は彼に依つて興り、彼に依つて亡ぶと言つても過言ではないのである。

(3) 法皇を幽し奉る 重盛薨後偶、中納言の缺員があつたので、清盛は藤原基實の子にして己れの女婿たる基通の爲に之を法皇に懇請したるに許されず、却つて基房の子師家を中納言に拜するや、清盛大に怒り福原より兵數千を帥ひて上り、基房の關白を奪ひ基通を内大臣關白に進め法皇に親近するもの三

十九人の官職を奪ひ、法皇を鳥羽殿に幽し奉つて福原に歸つた。

(4) 安徳天皇 高倉天皇は性仁孝、法皇の爲深く之を憂へられ、僅かに二十歳の御齡にて早くも位を安徳天皇八十一代に譲られた。天皇は徳子の生み奉つた方で御年僅かに三歳であらせられた。

□整理 一、教科書讀解。二、質疑應答。三、設問 (1) 平治の亂後清盛及其の一族の昇進の様を語れ。(2) 平氏の威勢の隆盛であつたことは何で分るか。(3) 清盛は誰に倣つたか(4) 清盛横暴の大要を語れ。(5) 平氏中最も惜むべき人は誰か、何うしたか、重盛は何んな人か、今少く長く生きてゐたら何うであつたらう。

第三時 源氏の舉兵

□目的 源頼政の舉兵を授け、平氏の横暴の極遂に其滅亡を來し、源氏の興起せし所以を知らせるのである。

□方法、豫備 (1) 前時分大要の復習。(2) 目的指示。

□教授 一、源頼政の擧兵

(1) 頼政以仁王の令旨を諸源に傳ふ。頼政は頼信の兄頼光の玄孫である。平治の亂源氏を裏切りて平氏に與した時義朝は「源氏にあるまじき卑劣の擧動」と罵れば頼政は「信頼の如き不覺人に與する愚物を出したるは源氏の恥辱ぞ」と罵りかへし、平氏と共に法皇及天皇を護衛し奉つたの。源氏中此の家のみは榮えてゐた。

然るに清盛の横暴日に甚しきを見るに忍びず、後白河法皇の第二皇子以仁王を奉じ清盛の罪を鳴らし之を討伐すべき令旨を諸國の源氏に傳へたのである、頼政は尤も騎射に精通し而も和歌が上手で所謂文武の名將であつた。二條天皇御惱あらせられたことがあるが夜深くして東三條の森より黒雲一叢立來るので頼政に命じて退治せしめられた、頼政矢を以て黒雲の中を射て怪物を落した、頭は猿眉は虎、尾は狐、足は狸、聲は鶴であつた之即鶴である、頼政曾つて「登るべき便なければ木の下に椎(四位)を拾ひて世を渡るかな」と詠じた時に從四位であつた。清盛之を聞き奏請して從三位に叙した、頼政官位の先途既に達げたといつて剃髮した源三位入道と稱す。

以仁王は常に御不遇にして年已に三十を越えさせ給ふも、親王の宣旨さへなく常に御不平にて寒閑に年月を過させられた。而も御才覺はあらせられたので頼政は之を

奉戴したのである。

(2) 宇治川の戦。頼政令旨を諸國に傳へ、延暦寺等の僧兵を招き一舉に平氏を討たんとしたが、謀漏れ延暦寺の僧兵も反覆したので頼政は王を奉じ興福寺に走らんとした。平軍の追撃に遇ひ軍を平等院に駐め宇治の橋を撤して拒いだが遂に衆寡敵せず、頼政は先づ王をして興福寺に逃れしめ自らは平等院で自殺した。埋木の花咲くこともなかりしにみのなる果ぞあはれなりける。之は頼政の辭世の歌である。年七十七、時に治承四年五月である。王は井手の川を渡り光明山に掛らせ給ふ時失に中りて薨せられた。御年三十、南都即興福寺の僧兵三萬、先陣已に木津川に着したるに、時既に及ばずして引き返した。

二、平氏の滅亡

(1) 源頼朝の擧兵。頼朝は伊豆にありて、豫てより機をうかがつてゐたが王の令旨に接し、治承四年八月兵を擧げ伊豆の目代平兼隆を殺し石橋山に至りし時大庭景親

の爲敗られ山中に隠れ(伏木隠れ)漸く逃れた。間もなく豆相房總武等の諸豪族を従へた。是れ頼義・義家父祖の餘澤の然らしむる所である。清盛は之を聞き平維盛をして之を討たせた。平軍三萬、源軍二十萬富士川に對陣したが、頼朝の將武田信光兵を率ゐて平軍の後をつかんとした、其の時鷺鴨驚き飛びければ平軍大に驚き、戦はずして逃れ歸つた。(何故此の様に弱くなつたか)

(2)源義仲の擧兵 義仲は義朝の弟義賢の子、木曾に育つてゐたが以仁王の令旨を載き兵を擧げ越後に出でた。壽永二年維盛は七萬を以て俱利伽羅岳に陣したが、義仲は牛四五百頭に炬をつけて殺到したので大敗した。義仲は更に進みて遂に京都に入り宗盛等は安徳天皇を奉じて西海に奔つた。清盛は之より先悶死してゐた。遂に「頼朝の首を斬りて我墓に供へよ」と遺言した。

(3)義仲の敗死 義仲京師に入るや功に誇りて專横の行多く部下掠奪等をなして京都を騒がした。頼朝は之を聞き、豫てより義仲の功を猜み、遂に範頼・義経をして西

上せしめ義仲と宇治川に合戦し大に之を敗つた。梶原景季、佐々木高綱の先陣争ひは此の時である。義仲は粟津に至りし時矢に中りて死した、時に年三十一。

(4)一の谷の戦 西に落ちたる平氏は敵の内訌に乗じ、福原に引返し生田門を東門とし一の谷を西門として守つた。範頼は五萬六千を以て東より義経は二萬を以て西門及鴨越より攻めて之を敗つた。敦盛直實の美談は此の時である。

(5)屋島の戦 福原より海に泛んで奔つた平氏は屋島に逃れて之に據つた、義経は軍艦を率ゐて之に上陸し遂に之をも敗走せしめた。(那須與一の美談、佐藤繼信の戦死) 平氏は海に泛んで九州に行かんとしたが、彼地には已に範頼の待つあり遂に長門壇浦に碇泊した。

(6)壇浦の戦 平船五百、源船八百四十、平軍大敗し皆海中に身を投じて死んだ、二位尼は安徳天皇(八歳)



第十四 源平二氏の盛衰

を懐いて亦海に没し此に全滅した。唯宗盛のみは擒となりて近江に斬られ生恥をさ  
らした。(平教經の奮戦)時に壽永四年(一八四五)平治の亂平ぎてより二十餘年に過  
ぎず、頼政の敗亡より僅かに六年。

□整理 一、教科書の請解。二、質疑應答。三、設問 (1)源頼政は何故兵を擧げた  
か、以仁王の令旨は如何なる響を興へたか。(2)頼朝の擧兵に就いて語れ。(3)義  
仲の擧兵……義仲と頼朝は何故争ふたか。(4)平氏の弱かつたのは何で分るか……  
其の全滅したのは頼政擧兵後何年のことか、平治亂後何年か。(5)隆盛を極めた平  
氏がかくまで速に全滅するに至りしは何故か。

第四時 復習(第十三、第十四) (一時間)

□要旨 隆盛を極めたる藤原氏も後三條天皇及白河法皇の爲に其の權を失ひ、王權は  
盛になりたるも朝廷崇佛の結果諸寺院の勢力強大となり僧兵の拔扈を致し、之を防  
がんとして地方の武士を京都に招きたる結果は源平二氏の交互隆盛を來たした。其

の間の因果應報及相互關係を明かにするのである。

第十五 鎌倉幕府 (五時間)

□要旨 源頼朝の治績三代にして源氏の正統絶え、北條氏が實權を握るに至りし事情  
を知らしめ、且承久の亂の顛末を授けると共に、當時公武思想の衝突を知らしめ、  
北條氏の不臣を責め、猶武家政治の根底を鞏固ならしめたる所以を了解せしむるの  
である。

□教授上の注意

一、頼朝が守護地頭を置きて地方を統治せしことは當時地方政治の紊亂、朝權の衰微等より推して已むを得  
ざるものありしと雖も、遂に皇權をして盛ならしむること能はざりしは其の忠君の念猶厚からざりしによる  
ことを知らしめる。二、頼朝の人物を批判せしめ源氏が僅かに三代にして亡びたるは、全く其の短所の然ら  
しむる所であることを了解させる。三、頼朝が虚を棄て實を尙びし政策は北條氏も之を襲用した、鎌倉幕府  
が割合に永續せしは此にある。彼の平氏と對照すれば非常に興味ある所である、頼朝が意を此に用ひしこと

により其の非凡の政治家たることが分るのである。四、承久の亂の結果は著しく天皇の御威光をして衰微せしめ遂には皇位繼承の大議にも喙を容れ、地方に於ては守護地頭の威益、加はりて、武家の天下をして益其の天下たるに至らしめたことをも了解させる。

□教具 源頼朝肖像、犬追物、流鏑馬、鎌倉地圖、戰場に於ける鎌倉武士の圖。

□區分 第一時、頼朝居所を鎌倉に定む、守護地頭設置。第二時、奥羽の平定、頼朝征夷大將軍に任せらる。第三時、源氏の正統絶ゆ、頼經を迎て將軍となす。第四時承久の亂。第五時、全課復習。

第一時 頼朝居所を鎌倉に定む、守護地頭の設置

□目的 頼朝居所を鎌倉に設けて幕府の基礎を定め、謀反人の出づるを防ぐを名とし法皇に請ひて守護地頭を設置し、以て天下の實權を握るに至りし次第を授けるのである。

□方法、豫備 (1)初め盛なりし源氏が中途にして衰へしは何によるか。(2)平氏滅亡の原因は何か。(3)源頼朝が擧兵するや關東の將士争ふて之に従ひしは何故か。

平氏討滅に最も功勞ありしは誰か(5)頼朝は何處に居たか(6)目的指示。

□教授 一、頼朝居所を鎌倉に定む

(1)關東に於ける頼朝の熱望 初め源義朝の敗走するや頼朝は年十三、連日の戦に疲勞甚しく馬上にて度々眠りて後れ、遂に平宗清の爲に美濃路に於て捕縛されたが清盛の繼母池の尼の命乞によりて助けられ伊豆の蛭子ヶ島に流された。かくて以仁



頼朝及義経の筆

王の令旨を受くるに及び三十四歳にして漸く立ち、一度石橋山に敗れたが房總に渡るに及び、源氏恩顧の諸豪族忽ち集り來り關八州を呑まんとするに至り居所を相模の鎌倉に定めた。

(2)侍所、公文所、問注所 頼

朝は先づ侍所を置き和田義盛を以て其の別當とし武士を總管せしめ、又政治、法律に精通せる大江廣元、三善康信等を京都より招き公文所<sup>政所</sup>問注所を設けて政務に當らしめた。康信は頼朝の乳母の夫で擧兵以前より常に京師の状況を報じてゐた。康信問注所の長官(執事)となり、廣元は公文所の長官(別當)となる、問注所は一の裁判所で、公文所は民政を總理する所であるが、裁判の重大なる者は此處で決せられてゐた。

## 二、守護地頭

(1) 義經との不和 頼朝が天下を定むることを得たのは弟義經の軍功に因る所が最も多かつた、義經は平治の亂の時母常盤と共に平氏に捕へられ鞍馬寺にやられ、後逃れ出でて奥州の藤原氏に依り、頼朝の擧兵を聞き行つて頼朝と黄瀬川に會見し之より大に功を建てたのである、然るに頼朝は猜疑の念深く其の功を忌んでゐたが、梶原景時が義經を讒したことや、義經頼朝の手を経ずして判官に任せられ且つ頼朝

より先に昇殿を許されたることや、義經が敵の(平時忠の女)を娶つたこと等により愈々不和となつた。義經が宗盛父子を護送して東下するや頼朝之を鎌倉へ入らしめず、義經は異志なき事を陳べたが頼朝の意を解くに由なく腰越より追ひ返さるゝに至つた。頼朝は人を京都に遣はして其の邸を襲はしむるに至り、義經は後白河法皇に奏請して頼朝追討の院宣を貰つたが、事の成らざるを知り、吉野に隠れ更に服装を變じて山伏師となり終に奥州に入り舊恩人藤原秀衡に頼つた。(靜御前の舞、勸進帳 安宅の關所の通過)

(2) 守護地頭 是に於て頼朝は廣元の言を用ひ、豫め謀叛人の出づるを防がんが爲法皇に請ひ奉りて、諸國に守護地頭を配置し自ら之を統べた。守護は國府にありて國司と相並びて軍事警察の事を司り、地頭は公領莊園の別なく之を置きて年貢を取立つるを以て重なる職とした。是より國司の權は次第に守護に移り莊園の領主も亦漸次其の權を地頭に奪はれた。抑々王政衰へて武士の勢を得たること年既に久しく

保元平治の亂を経て十分其の實力を發揮し、平氏一たび政權を掌握せしが今や頼朝部下の武士を守護地頭として諸國に配置するに及び、天下の實權は遂に頼朝に歸するに至つた。

□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (1)頼朝の居所は何處か、何故に鎌倉に定めたであらうか。(鎌倉は三方山を負ひ一方海に臨み足柄箱根等の嶮あり天然の城郭をなしてゐること、關東は源氏恩顧の武士多きこと、京都に遠く容易に藤平二氏の如く文弱に染み難きこと等である。) (2)頼朝は如何なる役所を設けたか。(3)何故守護地頭を設置したか、守護地頭は各何を爲す所か、其の結果は如何なつたか。

### 第二時 奥羽の平定、頼朝征夷大將軍に任せらる

□目的 頼朝奥羽の藤原氏を亡し遂に天下を平定して征夷大將軍に任せられ、茲に幕府の政治の基礎を定めたことを明にするのである。

□方法、豫備 (1)前時分復習。(2)目的指示。

□教授 一、奥羽の平定

(1)義經藤原氏による義經の出奔するや奥羽に遁れて平泉(岩手縣)なる藤原氏に頼つた。藤原氏は其の祖清衡が後三年の役に義家を助けて功を立てしより以來、代々奥羽にありて勢力を振つてゐた。

◎藤原秀卿……清衡―基衡―秀衡―泰衡

奥羽の地は僻遠であるから平氏の盛時でも其の威令は尙十分に及ばず、義經は曾つて身を清衡の孫秀衡に寄せたことがあつたから、今や鎌倉の探索厳しくして隠るるに所なきに至り、辨慶等を従へ修驗者に身をやつして再び此に來たのである。秀衡は能く之を遇した。

(2)頼朝藤原氏を亡ぼす 頼朝はかねてより奥羽を平げて全國を統一せんと志があつた、義經の逃れしを聞きて秀衡に命じて之を出さしめんとしたが、秀衡知らず



として應じなかつた。秀衡死せんとする時子泰衡に遺言して「我死せば頼朝必ず重賞を以て汝を誘ひ義經を殺さしめん、然れども必ず之に應ずること勿れ、若し來り攻めば軍事は悉く義經に委して戦へ」と、秀衡の死後果して頼朝は重賞を以て誘ふた。泰衡之に迷ひ兵を遣はして義經を衣川に襲ふた。義經辨慶等力戦したが及ばず遂に自殺し泰衡は其の首を鎌倉に送つた。頼朝乃ち其の與みし易きを見泰衡の義經を匿せし罪を責め、自ら大軍を率ゐて四道より進み平泉に迫る。泰衡の軍連戦皆利あらず、泰衡蝦夷に逃れんとして其の臣河田二郎の爲に殺され奥州藤原氏は此に亡んだ。河田二郎は賞を得んとして却つて其の不臣を責められて之亦殺された。是より先頼朝は將士を遣はして九州をも平定せしめたから、是に於て天下復頼朝に敵するものなきに至つた。

二、頼朝征夷大將軍に任せらる

(1) 頼朝の入京 法皇は先に頼朝の入京を促し給ひしも猶辭して出でなかつたが、

奥羽の平定するに及び始めて上洛した。法皇乃ち權大納言兼右近衛大將に任せられた。然るに頼朝は平氏が藤原氏に倣ひて高位高官に陞り文弱に流れて滅びたるに鑑み、又常に名を捨て實を取るを旨としたから、幾何もなくして之を辭して、東上の歸途に着いた。

(2) 征夷大將軍となる 紀元一八五二年(建久三年)征夷大將軍に任せられた。征夷大將軍は武門の棟梁として頼朝が以前より希望してゐた所であつたが、後白河法皇許し給はず、法皇崩せらるるに及び終に此の任命あり、之より征夷大將軍は常置の職となり遂に天下の政治は大抵其の政廳たる幕府より出づることとなり、又武將として天下を治むるものの代名詞たるが如くなつたのである、即ち征夷大將軍とは名の如く蝦夷を征する大將軍の義で、坂上田村麿が始めて之に任せられたのであるが頼朝以後は然らず。

□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (1) 義經は何故秀衡に頼つた

か。(2)頼朝は何故藤原氏を攻めて亡ぼしたか。(3)泰衡の態度に就て批判せよ。  
 (4)頼朝は何故權大納言右近衛大將を辭したか。(5)征夷大將軍とは頼朝より如何なる職となつたか。

第三時 源氏の正統絶ゆ、頼經を將軍に迎ふ(五九の二まで)

□目的 頼朝は一族を殺したから其の薨後は間もなく北條氏の爲めに其の正統を斷たされたる次第を明にし、狡猾なる北條氏は政策上京都より幼將軍を迎へ、己れは執權として其の威を振ひしことを授けるのである。

□方法、豫備 (1)頼朝は何故義仲及義經を亡したか。(2)頼朝は如何なる人か……目的指示。

□教授 一、源氏の正統絶ゆ

(1)頼朝の功績 頼朝將軍職にあること八年、其間よく民政に意を用ひて民力を休養し人材を登用して政治を整ふる等其の功少からず、又深く藤原氏平氏の跡に鑑み

常に質素儉約を以て下を率ゐ、大に武道を獎勵して専ら意を實力の養成に注いだ。勇を尙び義を重んずる鎌倉武士道の起りは頼朝の力に待つことが多かつた。されば此の時代には日常の遊戯にも勇壯快活なるもの即流鏑馬、犬追物等が流行した、彼の仁田四郎忠常が富士のまき狩りに猪を打つたことや、曾我兄弟の仇討は此の時代が現出した産物である。

(2)頼朝の人物 頼朝は希代の政治家である。其の性用意周到にして未だ曾つて成算なくして事を擧げたことがない。意志は強固で其の目的を貫徹せずんば止まぬ。然れども猜忌にして兄弟功臣をして終りを完うせしめなかつたのは、自滅の因を造るに至つたのである。頼朝はさきに義經を殺したが後又温厚なる範頼を殺すに至つた。建久四年富士のまき狩の時曾我兄弟の仇討の騒ぎより頼朝殺さると鎌倉に誤傳せられた。妻政子大に驚きしに範頼慰藉して曰く「假令大變ありとするも幸に範頼のあるあり請ふ意を安んせよ」と、頼朝之を聞いて深く忌んだ。範頼は誓書を出し

て異圖なきを陳述したが、頼朝の意なほ解けず遂に伊豆修善寺に幽し後之れを殺した、平廣常、安田義定の如きも亦殺された。

(3) 頼家の廢死 頼朝相模川の落成式に臨み歸途落馬して病を發し遂に薨じた。年五十三、擧兵の年より凡そ二十年である。子頼家が將軍職をついだが時政は政子と權を専らにし、頼家は淫縱にして嬉戲度なきも時政は源氏を滅す意があつたから敢て諫めない。頼家の一子一幡の外祖父比企能員時政の專横を憤り密に北條氏を滅さんと謀つたので、時政佛事に託して招きて之を殺し一幡をも殺した、頼家之を聞いて怒り時政を誅せんとしたから、更に頼家を伊豆修善寺に幽し其の弟實朝を擁立し明年之を殺した、時に年二十三。

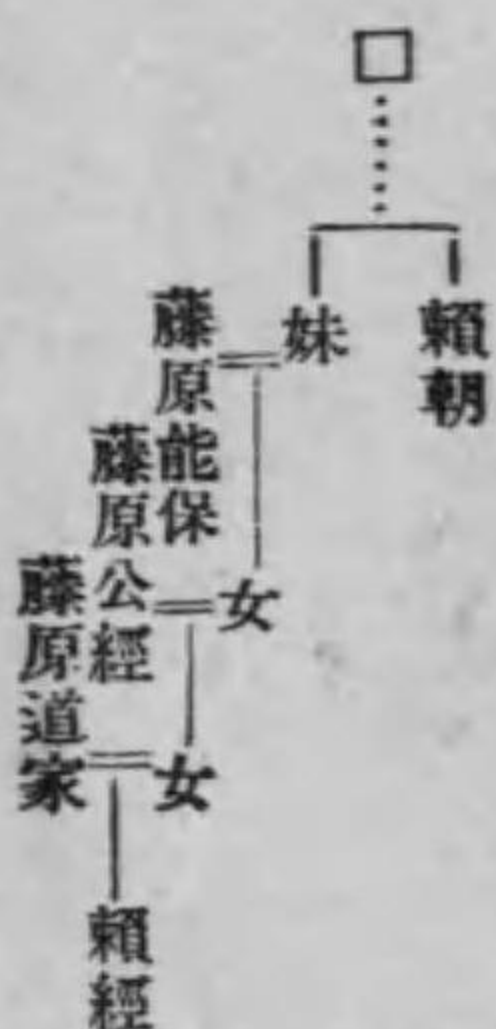
時政は之より幕府の實權を一身に集めてゐたが、後妻牧氏の言に迷ひ實朝を害して其の女婿平賀朝雅を將軍にしやうとする陰謀を企てたから、政子は實朝を義時の家に奉じ時政を伊豆北條に移した、義時は父に代りて執權となり北條氏の勢力は毫も衰へなかつた。

(4) 實朝の横死 實朝は性温雅で文筆を好み和歌を能くした、累進し右大臣とな

つた 後鳥羽上皇は關東の權強くて制し難きを惡み驕戾自ら斃るるを冀ひ請ふがまゝに官を授けた。承久元年拜賀の禮を鶴岡八幡宮に舉行す歳に當り頼家の子公曉の爲めに害せられた。年二十八、さきに頼家の害に遭ふや公曉年僅かに四歳、後僧となり鶴岡八幡の別當に補せられたが、早くより父の害せられたるは義時と實朝の爲なりと信じ、遂に之を殺して仇を報せんとしたのである。後公曉も北條氏に殺され(年十九)此に源氏の血統は絶えた。頼朝が征夷大將軍を拜してから僅かに二十八年である。

## 二、頼經を迎へて將軍となす

かくて政子は其弟義時と謀り頼朝と聊かの血縁ある藤原頼經を京都より迎へて鎌倉の主とした。此の時頼經年僅かに二歳であつたから政子はかはりて政務を統べた、世に之を尼將軍といふ。而して義時は執權として其の威を振ふてゐた。



北條氏はもと平氏である故に源氏を亡ぼしたが、而も己は將軍とならずして其の幕府の實權を握り名を棄て實に就き、且つ世の譏を避けたのである。

□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (1)頼朝の功績に就て語れ。

(2)頼朝は如何な人か其の人物を批判せよ。(3)源氏の末路は如何、其の正統の早く絶えしは何故か……平氏の末路と比較せよ。(4)源氏を亡ぼしたる北條氏は如何なる政策を用ゐたか、何故二歳の將軍を迎へたか。

□挿畫 鎌倉武士 本圖は蒙古襲來繪詞中の一部を寫したもので左方の武士の持てるは家紋を印せる旗である。此の紋は元寇の時戦功ありし竹崎季長の紋であるから、其次の武士は季長で他は一族の黨であらう。馬上の武士の着せるは鎧にして徒立ちの三人の着せるは腹巻である、長刀を持てる二人の冠せるは引立烏帽子で他の一人の冠せるは侍烏帽子である。當時の戰場に於ける武器は弓箭長刀を主なる者としてゐた。

第四時 承久の亂

□目的 承久の亂を授けて鎌倉幕府愈々強固となり北條氏愈々權力を専らにするに至り

し次第を知らせるのである。

□方法、豫備 (1)鎌倉幕府の制度は如何。(2)守護地頭は何故設置されたか。(3)頼家、實朝の害せられたる次第を語れ。(4)源氏滅亡せし後北條氏は如何にしたか。(5)目的指示。

□教授 一、承久の亂

(1)後鳥羽上皇の壯圖 上皇は英明にして文學、遊藝、武事の御嗜み深く常に武家の專横を憤られ、竊かに政權を恢復せんとの御志があつたから 之が目的を達せんには武力に依らざるべからざるを知り、北面の外に西面の武士を増置し、又備前の刀工を宮中に召して刀劍の鍛冶に従事せしめ、上皇自ら爐に當り刀劍を鍛ふて將士を奨勵せられ且つ近國の武士に結ばれた、實朝を昇して右大臣となされたのも陽に其の官を進めて羽翼たらしめんことを希はれたのである。然るに實朝は敢なく薨し源氏は亡んだが幕府の内部は動搖せざるのみか、京都に向つては益々其の強硬の態

度を加へ来るものの如くである。此に於て上皇大に憤られ承久三年四月鳥羽城南寺の流鏑馬に托して兵を集められた。近畿の兵集まる者千七百、義時の罪を鳴らし追討の宣旨を五畿八道に下された、是れ上皇が西面北面の武士の言を輕信せられたことと、義時を恨める三浦胤義が京都の大番役となれるを誘ひ、其の言によりて關東方に於て三浦氏の一族朝廷に付けば、北條氏を亡ぼすこと難きに非ずといふを信せられたことは甚だ御輕慮で、遂に大敗するに至つたのである。

(2)東軍の西上と戦況 鎌倉では尼將軍政子諸將を會して「故右大將(賴朝)平氏を討ちて大業を創む關東の將軍誰が其の恩を仰がざらんや、而して今朝廷讒臣の言を信じて東伐の院宣を下さる、苟くも名節を惜しむの輩は早く胤義等を討ちて三代將軍の遺蹟を全うすべし、然れども院宣に應ぜんとする者あらば今之を決せよ」と、諸將一人として命を拒むものなく涙を揮つて從軍を乞ふた。

かくて軍議に移つたが、大江廣元の議により長福三道より京都を衝くこととなつた、東海道の軍は泰時を大將とし弟時房三村義村を副とし、東山道の軍は武田信光等之を率ゐ、北陸道は泰時の弟朝時及結城朝廣之を率ゐ、總勢十九萬、初め泰時は「普天の下王土に非るはなし、今京都に抗せんとするは臣子の義に非ず、宜しく朝下に詣でて朝命を聽くべし」と諫めたが遂に西上せんとするや途中より引きかへし「若し乘輿親征し給

はは如何すべき」と義時「もしさるることあらば肯て脱ぎ弓弦を切りて身を任せ奉るべし。されど諸將來らば命を棄て、千人が一人になる迄も戦ふべし」と、泰時乃ち十八騎で出立したが、行く／＼兵集まりて直に十九萬騎となつたのである、京都では兵五萬を分ちて二となし、一は美濃尾張の間に配置し東海東山の二道を守らしめ、一は越中を扼さしめた、然るに第一軍破れて京都に敗走したから上皇は更に諸將をして宇治勢多の二隊として之を拒がしめられたが、東軍の時房は勢多より泰時は宇治より攻めたので西軍再び敗れ、泰時は京都を侵した。

(3)結果 泰時は義時の指揮よりに刑罰を行ひ軍功を賞した。即ち上皇の謀に與れる人々を或は斬り或は流し、恐れ多くも三上皇を遷し奉るに至つた。後鳥羽上皇は隱岐に十九年間御年六十、土御門上皇は四國に十一年御年三十七歳(土御門上皇は謀に與らざるのみならず之を諫められたとのことで、北條氏も措きて問はざりしを朕獨り止まるに忍びずとの仰せに依り土佐に流し後阿波に遷し奉つた)順徳上皇は佐渡に二十二年御年四十六。後土御門天皇は勅使を隱岐に遣はされ後鳥羽上皇の神靈を迎へ、攝津三島郡島本村に祀り水無瀬宮と稱せられた、維新後土御門順徳兩上

皇を之に合祀せられた。

又秦時は仲恭天皇を廢し後堀河天皇を擁立し奉り、公卿武士の所有三千餘箇所を沒收して諸將士に頒ち與へた、六波羅探題の設置も此の亂の結果である。

二、北條氏の政策 (1)六波羅探題 北條氏は京都の六波羅に探題を置き一族の人々を之に任じて京都の警備、及び近畿西國の政治を掌らしめた。

(2)幼少なる將軍の迎立 北條氏は鎌倉に藤原氏又は皇族より幼少なる將軍を迎へ立つるを常とした、藤原氏出の將軍は賴經(九歳より二十七歳) 賴嗣(賴經の十六歳より十四歳) 皇族出の將軍は宗尊親王(後嵯峨の皇子十一歳より二十五歳) 惟康親王(宗尊の子三歳より二十六歳) 久明親王(伏見の皇子十五歳より三十三歳) 守邦親王(久明の子七歳より三十一歳)である。而して年が長ずると京都へ還した。

(3)鎌倉幕府 鎌倉幕府は賴朝以來百四十餘年間の久しきに及び、紀元一千九百九十三年(元弘三年)北條氏の亡ぶまで繼續した。

□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (1)承久の亂は如何にして起つたか。(2)皇軍は何故敗れたか(後鳥羽上皇の御違算、鎌倉武士の真相を想像せしむ)(3)承久の亂の結果は如何。(4)六波羅探題は何をする所か。(5)鎌倉には如何なる將軍を迎へたか、何故か。(6)北條氏は之より何うなるか、北條氏が愈天下の實權を握るべく成功したのは何によるだらうか。

### 第五時 全復習

□目的 鎌倉幕府の復習をなし武家政治の確立せし所以を了解せしむるにある。

□設問 (1)賴朝が居を鎌倉に定めたるは何故か、及其適非は如何であつたか。

(2)守護地頭は如何にして設置されたか、之に對する賴朝の眞の目的は何か、結果は如何。(3)賴朝が一族を殺ぎたる結果は何うなつたか……源平兩氏の末路を比較せよ。(4)承久の亂は天下の大勢に如何なる影響を與へたか。

### 第二學期分總復習

□要旨 天下の政權藤原氏より朝廷へ、朝廷より武門に遷りし大要を會得せしむるにある。

□教具 小學歴史教授用時代用區分圖、日本地圖。

□教授

攝政關白の實權(中史政權の爭奪)  
失墜||院政(源平二氏の起用) — 平氏の強大 [平氏の滅亡] — 鎌倉の政廳  
武士の地方鎮定||源平二氏の強大 — 源氏の隆盛 — 守護の設置 || 武家政治の確立  
地頭

#### 第一課より第十五課まで(二時間)

□要旨 我建國より鎌倉時代に至るまで時代變遷の大要を會得せしむるのである。

### 第三學期

#### 第十六 鎌倉時代の文物 (三時間)

□要旨 奈良時代の支那模倣文物、平安時代の優美纖弱文物とを比較して、鎌倉時代の文物が如何に雄壯剛健なるかを理解せしめ、吾人が時代の思想の支配を受くることの如何に大なるかを了解せしめんとするのである。

□教授上の注意

一、文物の教授は下手にやれば乾燥無味となり、餘り詮索に過ぐれば骨董的となる、併し文物は歴史の眞體のある所で教授の最も難しとする所、文物の研究は忽にしてはならぬ。二、鎌倉時代の武士の勇健の風は文學、宗教、工藝等に影響する所である。其の文物の果して如何なるものなりしかを知らしむるは時代の風尚と精神とを知らしむるもので、社會上の活智識を興ふるものである。此等の智識は現代を了解せしむる基礎的智識となる。三、武士道は忠孝を以て骨髄とせる我國固有の道徳で、國體擁護の大精神なることを會得せしめると共に賴朝は實に武士道の擁護者であること、及其の當時の文物が後世の士風等に影響することの大

なりしことを了解せしめる。

□教具 流鏑馬、犬追物の圖、保元物語、平家物語、源平盛衰記等の書物、其の他美術工藝品の寫眞。

□教材區分 第一時、鎌倉時代、風俗。第二時、文學。第三時、佛教美術工藝。

第一時 鎌倉時代の風俗

□目的 鎌倉時代の風俗に就いて知らせるのである。

□方法、豫備 一、前學期分大要の復習 (1)平安時代とは何時より何時までか。

(2)平安時代に於ける藤原氏及源平二氏の消長の大要を語れ。(3)鎌倉幕府の組織及地方制度は如何。(4)此の間朝廷の政權は如何に變化したか。

二、本時間の豫備として (1)奈良時代の文物は如何なる性質を帯びてゐたか(支那模倣時代)。(2)平安時代の文物の特色は何か(優美纖弱)。(3)賴朝が鎌倉に居るを定めてから何を獎勵したか、賴朝自身は如何なる方針であつたか(虚を去り實につく)。(4)目的指示。

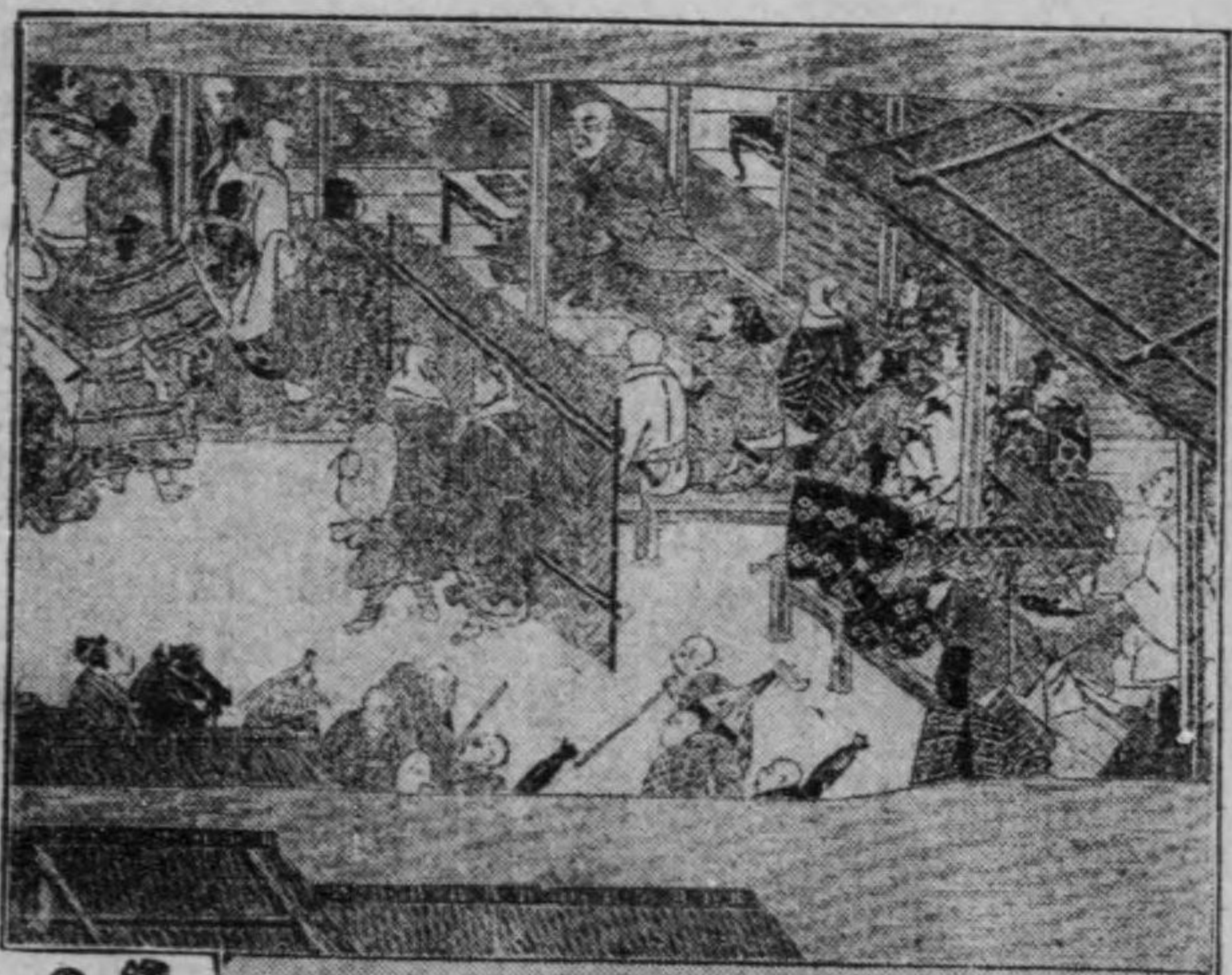
□教授 一、鎌倉時代

鎌倉幕府の創立は實に我國政治上の一大事變で、大化の改新及明治維新と共に我國史上の三大改革といはれてゐる、朝廷は之より勢力を失ふこととなり、諸國には守護地頭殆ど至る所に配置せられて、國司・郡司・領家・莊司等は次第に實權を失ふに至り天下は悉く武家の天下に歸した、一面より見れば質朴剛健なる田舎武士が優美文弱に流れたる公卿等を壓したものである。されば鎌倉時代は前奈良時代及平安時代の如く、王政の下に朝臣の優美なる製作物を現出したのは全く趣を異にして風俗・文學・佛教等皆其の影響を受けて皆雄壯剛健であらねばならぬ。

二、風俗

(1)賴朝の武士道獎勵 平安時代の末に當つて、藤原氏がたやすく平氏の爲に其の地位を奪はれたのは、榮華に耽り柔弱に流れ實力なきに至りしが爲である。





鎌倉時代の風俗

佛土佐  
吉光筆  
注然上  
人行状  
畫圖の  
中  
承元二  
年(八  
六八)  
源空が  
罪を獲  
て配所  
土佐に  
赴く途  
次播津  
經ヶ島  
に於て  
布教す  
る光景  
を示す

の遺法を守りて質素を旨とし益々尙武の風を盛にした、されば武士は互に恩義を重

平氏も亦いつしか藤原氏と同様なる  
運命に陥りて其の一門の滅亡を招き  
たれば、頼朝は深く成敗の跡に鑑み  
常に質素儉約を以て下を率ゐ、大に  
武士道を奨励して専ら意を實力の養  
成に用ゐた、頼朝の部下筑後俊兼が  
常に美麗なる衣服を着て幕府に出づ  
るを見て、自ら短刀を抜いて其の袖  
を裁つたことがある、されば皆華美  
を相戒めて質素を尙ぶ様になつた。

(2) 鎌倉武士 頼朝の後北條氏も其

んじ名を惜みて死を畏れず最も卑怯未練の行を賤しみ、其の遊戯の如きも流鏑馬、  
犬追物など勇ましきものを選んだ、又狩獵によりて精神と身體とを練磨するが如き  
ことも此の時代には屢々行はれた。

流鏑馬とは騎射の一種で、長さ二町許りの馬場を造り三つの的を立て騎馬にて走り  
乍ら射るのである、犬追物も又一種の騎射である、馬上犬を追ふて射るので馬場は  
方一町ばかり竹垣にて圓く周圍を圍み、中央に小繩杖一杖ばかりの圓陣を作り此の  
中に犬を引き来る、大繩は其の外にあり其の周圍に砂を布き射者は之に馬を乗り入  
れ先づ大繩に向つて矢を注ぎ、次に犬の小繩より出で來り大繩を越さんとする時射  
るを以て正式としてゐる、狩獵は相模の饗場野、下野の那須野、駿河の富士裾野等  
に大狩を催した、彼の頼朝のなしたる富士の卷狩は最も有名である。

□挿畫説明 鎌倉時代の風俗 本圖は東京帝室博物館所藏の圓光大師四十八卷繪卷物一遍上人繪卷物等  
より抜萃模寫したものである、圖中左上方に二人にて昇げるものは車輿といふ乗物の一種で、當時身分高き

人の乗用せしもの、車輿の左方に冠をつけたるは公達で其の傍にあるは従者である、公達は當時婦女の如く被衣カギを用ひ居りし者である、其の上方にある婦人は野菜賣りの女で、當時の風習女子が物を運ぶに多くは頭上に載せてゐた、小供の頭に三角の紙を着けたるは烏帽子を略したもの、物を負へるは商人で商品を背に負ひて賣りあるいてゐた、傘をさしたるは僧侶で虫の垂衣イナをきたるは貴女で、被衣を着たるは侍女であらう、市女笠イチメを被れるは僧侶で其の傍にあるは公達であらう。弓を持てるは武士の召使で馬上にあるは入道せし武士であらう、左方鹿の皮衣を着頭を袈裟様のものでつつんでゐるのは武士で、當時武士にして圓顔となることが流行してゐた。圖中の履物の緒は今日のものと同つてゐる。

□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (1)鎌倉時代とは如何なる時代か。(2)頼朝は何故武士道を鼓舞したか。(3)武士道とは如何なる者か。(4)當時の武士は何んな遊戯を尙んでゐたか。(5)武士道は尙今日に於ても一朝事ある時には發露せんとする者あり。何で分るか。吾々は平和に於いては武士道の精神を如何に活用すべきか。

### 第二時 文學

□目的 鎌倉時代の文學を授け、時代の思潮の影響を受け前時代に比し、一般に勇壯

なるものとなつたことを了解させるのである。

□方法、豫備 (1)前時分の復習。(2)目的指示。

□教授 文學

(1)武士と文學 世は一般に尙武の風盛であつたから、武士の間には文學に心を傾くる者少く、學問は重に公卿僧侶に依つて維持された。承久の亂に泰時に従へる五千騎の中院宣を讀み得た者僅かに藤田某一人であつた。之を見て如何に武士の間に學問の缺乏してゐたかが分る。幕府の記録「東鑑」アヅマカキは後の消息文の起原をなす。

(2)金澤文庫 然るに其の武士の中でも義時の孫實時其の子顯時の如きは京都より來れる學者に就いて學問をなし、武藏の金澤山稱名寺内に金澤文庫を設け、一般好學の士の研究に資せんとして多く和漢の書籍を集め、志ある者には閱覽することを許した。今も金澤文庫の版のある書物が残つて居る。

(3)和歌 京都では政權が鎌倉に移りて、朝廷の政務減少するに及びて和歌は却つ

て盛になつた、歌人に有名なのは藤原俊成、定家父子、藤原家隆、僧西行等である、此等の人々の名歌を集めたものが新古今集で、歌詞流麗歌調も高きもの多く、古今集以後一頭地を抜いてゐる、是より後勅撰の歌集が出て萬葉集古今集と共に總て二十種もある。

武人でも亦和歌を好む人々ありて、將軍實朝の如き最も有名なる者である、實朝の歌風は萬葉調で其の歌に雄壯なる所ありて、能く武士の剛健なる氣象の一端を現はしてゐる。

- ◎ 我がそは新島守よ隠岐の海の荒き波風心して吹け
- ◎ 夕されは野邊の秋風身にしみて鶉なくなり深草の里
- ◎ 又や見ん交野の御野の櫻が花の雪ちる春のあけぼの
- ◎ 駒とめて袖うち拂ふ影もなし佐野の渡りの雪の夕暮
- ◎ 大空は梅の香にかすみつゝ曇りもはてぬ春の夜の月
- ◎ 滋賀の浦や遠かり行く浪間より氷りて出づる有明の月

後鳥羽上皇  
俊成  
同 上  
定家  
同 上  
家隆  
同 上

- ◎ れがはくは花のもとにて春死なん其のきさらきの望月の頃
- ◎ 心なき身にもあはれは知られけり鴨立つ澤の秋の夕ぐれ
- ◎ 武士の矢並つくらふ小手の上に霞たばしる那須の篠原
- ◎ 山はさけ海はあせなん世なりとも君に二心我あれめやも
- ◎ 物によりてすぐれは民に憂へあり八大龍王雨やめたまへ
- ◎ ひんがしの國にわか居ればあさひさすはこやの山のかけとなりనికి

西行  
同 上  
實朝  
同 上  
同 上  
同 上

此の中で西行法師はもと北面の武士であつた、其僚友と共に朝に出づるを約して其の翌日之を訪へば已に其の逝去せるあり、西行乃ち無常を感じて遂に出家し、諸國を行脚して廻り至る所で和歌を詠じた人である、定家は小倉山別荘に居り新古今和歌集を撰び百人一首で名高い。

(4) 軍記類の讀物 當時一般の者が武を好んだから文學も亦昔の如き(源氏物語、伊勢物語)ものに非ず、勇壯なる實事物語、戰爭物語が多く世に出た、保元物語、平治物語、平家物語、源平盛衰記など之である。(之等の本の文章を少しづつ讀み聞か

せる、讀本中の待賢門の戦等は本文を少し改めたものである)  
軍記物ではないが兼好法師の徒然草や鴨長明の方丈記も名高い。

□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (1)鎌倉時代には學問は重に誰の間に行はれたか。(2)學問に對して武士は何うであつたか。金澤文庫とは何か。(3)和歌は何故盛であつたか何んな人があらはれたか。(4)如何なる讀物が流行したか……何故か。

### 第三時 佛教、工藝、美術

□目的 社會の變動は人心をして慰安を渴望せしめたが、此の時勢に應じて諸宗派が興り廣く世に行はれた次第を授け、且つ美術工藝に就いて知らせるのである。

□方法、豫備 (1)鎌倉時代の風俗の大要は如何。(2)此の時代の文學は如何なる者が流行したか。(3)目的指示。

### □教授 一、佛教

(1)新宗派勃興の氣運と眞言天台二宗の衰微 保元以來戰亂相繼ぎて世態變遷激しく得意の人失意の人悲しむ人等を生じ、人をして精神の安心立命を得らるべき信仰の必要を生せしめたのであるが、在來の天台・眞言二宗は各寺莊園等を有して富貴を極め次第に形式に流れて其の精神を失はんとするあり、且つ僧兵の暴威を振ふありて民心を失ひ、而も此の二宗は歸依するに學問を要して、一般人に行はれざるが故に、時代の要求に應じ難く稍々衰微するに至つたのである。

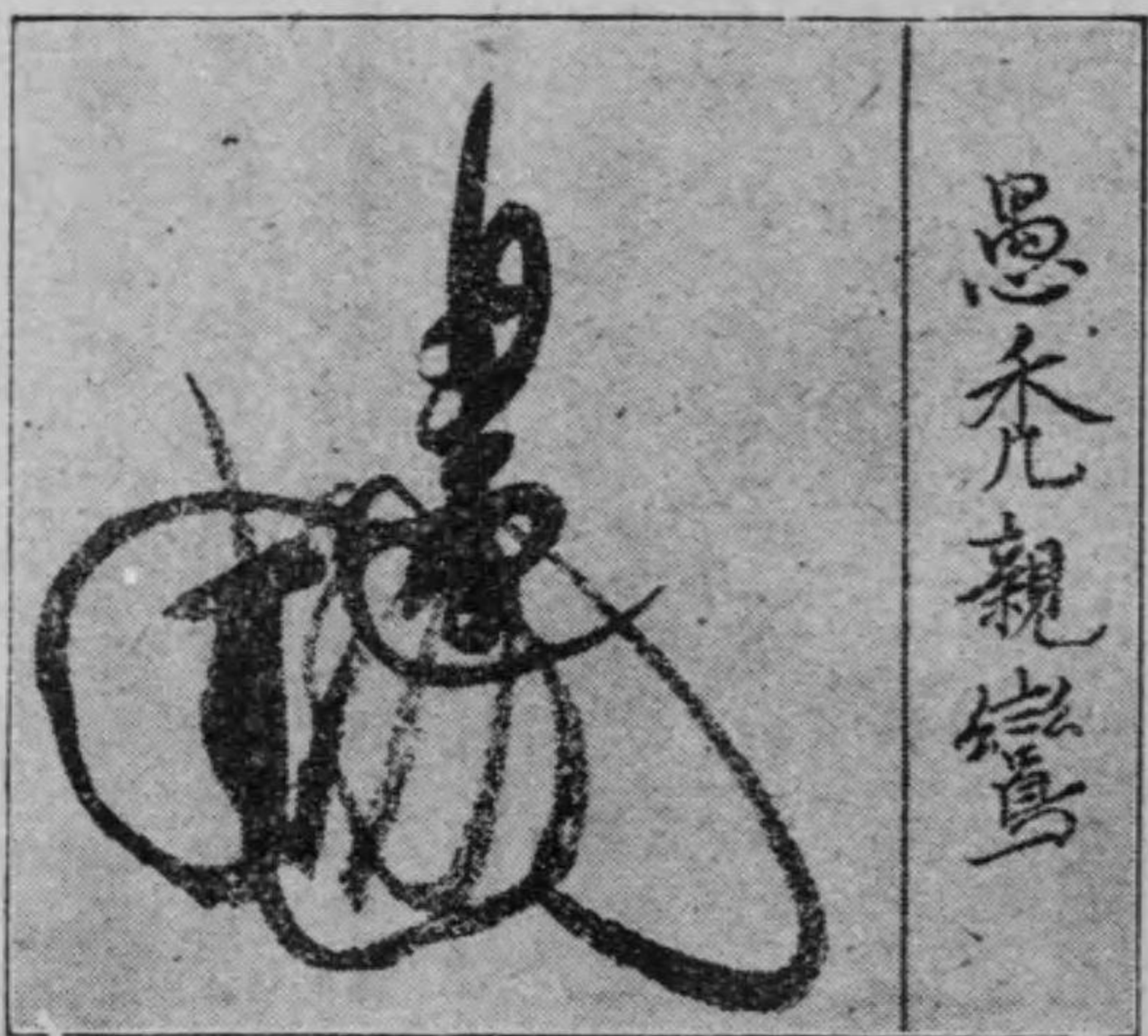
(2)淨土宗と眞宗 此の時に當り平易にして一般人の要求すべく生れたのが淨土、眞宗の二宗である。淨土宗は僧源空が高倉天皇の御代に開いたもので、平易にして專修念佛の教を開き必ずしも苦行を要せず、唯南無阿彌陀佛の名號を唱ふるのみで淨土に達し得るといふ説法である。源空は法然上人といひ叡山で修業し、又南都の諸高僧を訪ひて智見を弘め、後京都の黒谷で此の教を開いたのである。  
眞宗は其の弟子親鸞の開いたもので、其の教義は一層平易で肉食妻帯を禁せなかつ

た。此の念佛宗が開かれてから老若男女を問はず靡然として之れに赴く者多かつたが、叡山の僧侶等源空等を以て佛敵となして屢々之を妨げたが却つて弘まつた。

(3) 禪宗(臨濟宗、曹洞宗) 後鳥羽天皇の御代に僧榮西、宋より歸り禪宗一派たる曹洞宗を傳へた。二宗共に其の教義は高尚で所謂不立文字で以心傳心、其の簡にして直に要を指し己に克つて膽を練るに便であつたから、武士の之を信する者多く、時頼時宗の如き信者を出した。京都で龜山、後宇多等の諸天皇を始め攝關等上流の間に流行した。京都には龜山天皇の南禪寺、花園天皇の妙心寺、鎌倉には時頼の建長寺時宗の圓覺寺等建立せられた。

(4) 日蓮宗(法華宗) 後深草天皇<sup>八十</sup>の御代僧日蓮、新に日蓮宗を唱へて「我妙法蓮華經は釋迦の眞教を説けるもので他の諸經は皆方辨經に過ぎず、此の故に我日蓮宗より尊きはなし」と又「念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊」といひ又「法華經

愚木九親繪寫



筆 日蓮

筆 日蓮

を信せざれば大難忽ち至らん」と、はげしく他宗を攻撃したから、幕府狂僧となし二度之れを流罪に處したが、日蓮少しも屈せず熱心に説いたので次第に弘まつた。かくて之等の諸宗は説く所各同じくないが、何れも時勢に適し廣く世に行はれた。

二、工藝、美術 (1) 建築 工藝美術も

亦此の時代には稍々平安時代と趣を異にしてゐる。建築には禪宗と共に新に支那

風の寺院建築法を傳へ、邸宅も朝臣の華麗なる御殿造り等とは異りて、質素にして實用に適した武家風のものが出た。武家の建築は周圍は鰭板を以て圍み垣とし、其

の外に溝を廻らす、屋根は一般に板屋多く中には蘆茅葺にて瓦葺はない。

(2) 繪畫 繪畫は土佐派の祖土佐光長及藤原信實等の名手現はれた、繪畫も亦時代の影響を受け、法然上人繪卷、平治物語繪卷、後三年合戦繪卷等主に戦争を寫せる繪卷物の類多く世に出た。

(4) 彫刻 彫刻には定朝の後裔なる運慶・湛慶の父子出でて其の名を轟かした。平安朝時代の優美なるに反し、皆剛健で東大寺の二王の如きは其の好標本である。

(4) 陶器 従來其の製作は頗る幼稚であつたが、加藤景正が僧道元に隨ひて宋に赴き支那の陶法を傳へてから其の技大に進歩した。(瀬戸焼の始め)

整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (1) 鎌倉時代には何故新宗教が盛に興つたか。(2) 新宗教には如何なる者があるか、各其の特色は何か。(3) 建築は平安朝時代に比し如何なる風が起つたか。(4) 繪畫は如何なる者が世に出たか。(5) 彫刻の特色は何か。(6) 陶器は如何にして進歩したか。

## 第十七 北條氏の滅亡 (五時間)

□要旨 後醍醐天皇英明の資を以て北條氏の討滅を策し、一度は失敗されしも聖慮空しからず遂に王政を復興された事を知らしめ、當時勤王の諸士の王事に盡したる事蹟を明らかにし、義勇奉公の志操を涵養するのである。

### □教授上の注意

一、武家政治の我國體にそむきたる政治なることを知らしめ、歴代天皇の政權の御恢復を圖らせ給ふことの道理なるを了解せしめる。二、兩皇統の分立は北條氏が漁夫の利を得んとしたものであるが、之が爲に兩皇統の御争烈しくなり、却つて其の滅亡を早めたことを了解させ、其の不臣を責めればならぬ。三、北條氏が色々都合なることありしにも拘はらず其割合に永續した理由を知らせる。四、弘安文永の役國費を消費すること大で幕府の威令行はれぬ様になつたことを説くはよいが、之が爲に元寇の防禦其のものまでも疑はしむることなき様注意せねばならぬ。五、我國に於ては一時に兩天皇あることあるべからず、光嚴院は決して皇位を踐まれたものでなく、唯尊號を奉りたるに過ぎざることを授けるのである。

□教具 天皇の繼統表、近畿地方圖、後醍醐天皇の御肖像、日本全圖、鎌倉古今圖。

□教材区分 第一時、承久の亂後皇位繼承、兩皇統の更立。第二時、北條氏の施政。第三時、幕府の衰運、後醍醐天皇。第四時、勤王の兵起る。第五時、京都の恢復、鎌倉陥る、全課復習。

第一時 承久の亂後の皇位繼承、兩皇統の更立

□目的 承久の亂後皇位の繼承を説き、兩皇統の更立するに至りし次第を明にするの  
一ある。

□方法、豫備 (1)承久の亂は何うして起つたか。(2)其の結果は何うなつたか。

(3)目的指示。

□教授 一、承久の亂後の皇位繼承

承久の亂に北條義時は長くも後鳥羽、土御門、順徳の三上皇を僻遠の地に遷し、仲  
恭天皇<sup>八十五代</sup>を廢し後堀河天皇を立て奉りしが、天皇は次で位を皇子四條天皇に譲ら  
れた。天皇は御幼少にて崩御せられ皇子がおはせなかつたから、北條氏は土御門上

皇が御父後鳥羽上皇の御企を諫められたのを徳として、御子後嵯峨天皇<sup>八十八代</sup>を立て  
奉つた。

二、兩皇統の更立 (1)後嵯峨上皇の御遺詔 後嵯峨天皇の御子後深草、龜山<sup>九十一代</sup>

の兩天皇相次いで立たされたが、後嵯峨上皇は龜山天皇の賢明なるを愛し、其の御  
子孫をして永く皇位を承けしめ給ふべきことを遺詔せられた。(御意北條氏を亡ぼし  
政權の回復にあられた) 後深草上皇の御子孫には其代りに莊園を多く與へられた。

(2)北條氏の容喙と御深草龜山兩統の對立 後嵯峨上皇崩御後宇多天皇立ち、龜山  
上皇政を院中に聽かるゝに及び後深草上皇喜ばれず、此に於て執權時宗は繼承の御  
事に容喙して、後宇多天皇の後に後深草上皇の皇子伏見天皇を立て奉つたが、次で  
其の皇子後伏見天皇即位せられた。後宇多上皇は之を憤られ後嵯峨上皇の御遺詔に  
違ふことを幕府に責められたので、北條氏は乃ち後宇多上皇の皇子後二條天皇を立  
て奉つた。是より後深草・龜山の兩統かはるゝ皇位を承けつがれることとなつた。



(藏寺禪南都京筆幽探野時) 皇 上 山 龜

つて北條氏が滅亡の因を作つたのである。

二五二  
伏見上皇は京都の持明院におはしたから後深草統を持明院統といひ、後宇多上皇は嵯峨の大覺寺におはしたから龜山統を大覺寺統と稱してゐる。かくて兩統の御争は止まなかつたから、常に幕府によりて最後の決を取るに至る有様であつた。故に大覺寺統の御方は常に御不平であつた、是却



□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (1)北條氏が後嵯峨天皇を立て奉るに至りし次第を語れ。(2)後深草統・龜山統は何故更立する様になつたか。(3)もし北條氏が容喙しなかつたら何うであつたであらう。(4)北條氏自身の爲に策を得たものであつたか否か。(北條氏が容喙したことは不臣の責めは免かれが爲京都に於ける反感は遂に後醍醐天皇の御討伐となつたのであるから、北條氏の爲には決して策の得たものではなかつたのである)

第二時 北條氏の施政

□目的 北條氏は無道の行多きに拘はらず、久しき間其の勢力を維持し得たるは、北條氏の施政甚だ良かりしたためなることを了解せしむるにある。



□方法、豫備 (1)前時分の復習 (2)北條氏は色々不敬なることをしたにも拘らず猶勢力を維持し得たるは何によるであらうか。(目的指示)

□教授 北條氏の施政

(1)泰時の仁政 北條氏はかくの如く無道の振舞を極め、皇位の御繼承に容喙し不敬の行が多かつたが、人才亦少からずしてよく頼朝の遺法を守り心を民政に用ひたから勢望は増、加はつて來た。中にも泰時は在職十八年、其の事蹟は頗る見るものがあつた。泰時は性恭謙、寡慾、仁愛の心に富み、政治公平で親族故舊の爲に私せなかつた。泰時嘗て頼朝の忌日に法華堂に詣でしに堂に上らずして禮拜す、寺僧之を問へば「將年世にあるの日吾れ未だ上るを得ざりき。今にして何ぞ禮を易へん」と、政子が義時の遺産を諸子に分與せんとした時、泰時は「我は執權職なりまた求むる所なし」とて之を諸弟に分與した。

又甚だ儉素で其の邸宅墻垣疎なるも之を改めず、而も伊豆北條の民饑餓せる時泰時

自ら往つて視察し米を貧民に貸與したが、其の返濟期に風害ありて米穀實らざるや泰時其の證書を焼き酒食を與へ人毎に斗米を給した。

かくの如く泰時は質素儉約を守り仁慈公平を旨としたが、又貞永式目五十一箇條を定めて武家政治の據る所を示した。其死するや衆其父母を失ひたる如く哀しんだ。

(2)時頼の仁政 時頼は泰時の孫で在職十一年、よく祖父泰時の遺風を守りて善政



時頼は後深草天皇の康元年(一九一六)年三十にして出家し龜山天皇の弘長三年(一九〇三)年三十七歳にして卒す此の像は何人の手に成りし、詳かならざれど後深草天皇の寛元四年(一九〇六)に宋より渡來し時頼の敬信を受けて日夕親しく接したる名僧隆の贊あるによりその正確なるを知るなり

北條時頼(京師萬壽寺藏)

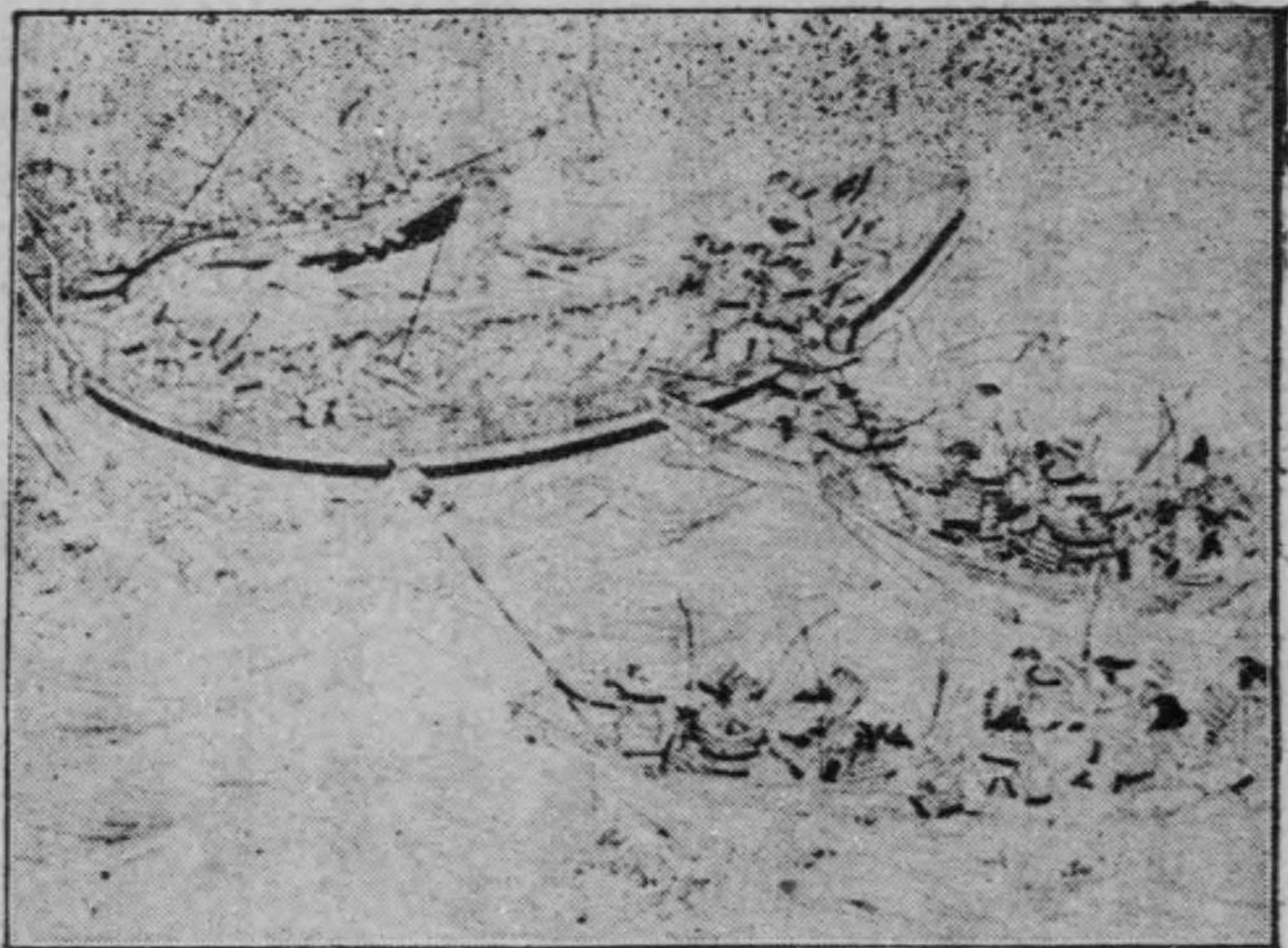
を行ふた。性勤儉に富み一夕祖父大佛宣時オウラギと會飲し味噌を以て肴とした、之母の松下禪尼が障子の切張り等をし

て勤儉の風を見習はせたから其の感化あづかつて力があるのであらう、時頼職を罷めて後は行脚僧となり諸國を巡回して親しく民情を視察した。(尋常五年用鉢の木參

照) 時頼深く禪宗を信じ建長寺を建て、之に居た。辛年三十七、諸將士之を悲しみて爲に薙髮する者が多かつた。

(3) 時宗の果斷 泰時時頼の仁政により人心全く北條氏に歸し、鎌倉幕府は遂に北條氏の幕府たるが如くなつた。

時頼子の時宗繼ぐに及び、文永・弘安の役起り時宗の果斷よく外敵を退け國威を海外に發揚した、時宗は相模太郎と稱し幼より武勇果斷、射術に長じてゐた。十一歳の時小笠懸の射藝に一矢で見事に適中し將軍の感賞を蒙つたことがある。執權となつたのは十五歳、蒙古の初度の使者が我國に來たのは十九歳の時、以後文永の役に至る迄數回元使が來朝したのである、蒙古は宋末に支那の北方に起つたもので鐵木眞部長チンとなるに及び、支那内外蒙古の地を領有して帝位に即き成吉思汗ジンギスカンと號した。其の子太宗宋を侵し朝鮮を降し暴威を歐洲に振つたが、其の子忽必烈の時支那本部北半を取り歐洲に入り、モスコ、ハンガリヤ、ポーランド等を征服した。貢を蒙



元寇之圖 (竹崎季長蒙古襲來繪詞の内) 本圖中敵に躍り入り將に敵の首をかつかんとしつあはる即ち季長

古に入る、もの大小千餘國、此に於て忽必烈は我を従へんとて龜山天皇の朝高麗を介して使を遣はしたのである。蒙古は國號を元と改め我後宇多天皇の文永十一年一九一〇十月、舟九百、兵三萬三千、對馬壹岐を侵し肥前松浦を侵し太宰府に逼り宮崎八幡祠を焼いた。太宰小貳景資等奮戦したが我軍不利であつた。是戰術の相違で我の一騎討に對し團體的の掛引をなしたからで、且つ敵は爆裂彈を使用してゐた。然るに二十日大暴風雨の爲我軍の大勝に歸した。

此の年の翌年元の使者を龍の口に斬り我決意を示し、九州博多の沿岸に石壘を築きて敵に備へ、更に船を造りて元を進撃せんとした。弘安二年元は宋を滅して更に使を我に致したが又之を博多に斬つたので、四年東路軍三萬朝鮮より江南軍の未着に先ちて博多に迫つた、大友、小貳、菊池、諸氏の奮闘、河野通有、竹崎季長等の襲撃に遭ひ遂に能く上陸するを得なかつた。然るに江南軍十萬來るや之と協力して我に當らんとせしに、七月一日颶風に遭ひ多くは沈みて生きて還る者少く、江南軍の一部は鷹島に上陸してゐたが我兵の爲殺され、生きて還る者僅かに三人である。

□此の外敵に對して勝利を得しは時宗の果斷、多年蓄積せる實力ありしこと、上下舉國一致せること、敵は最も波荒き博多に二度までも來りしこと(二度目の如きは石壘の防禦あり)敵は大陸に住し海戦には馴れぬこと、敵に疫病流行せしことなどである。

□就中時宗の果斷、舉國一致に就いては兒童をして大に自覺せしめねばならぬ。

□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (一)天下の人心は如何にして北條氏に歸したか。(二)我のよく元寇を退け得たるは何故か。

### 第三時 幕府の衰運、後醍醐天皇

□目的 幕府の衰運に向へる次第を授け、後醍醐天皇政權を恢復せんとせられたことを知らせるのである。

□方法、豫備 (一)何故兩皇統の更立を見る様になつたか。(二)北條氏がよく天下を治め得たるは何故か。(三)目的指示。

#### □教授 一、幕府の衰運

(一)幕府の財政困難 弘安の役後は幕府の敗政次第に困難となり、幕府の令に背くものが生じて來た。

(二)高時の暗愚 高時は時宗の孫で性暗愚にして、政を臣長崎高資に任せて酒宴を事とし鬪犬を喜び租税の代りに犬を献せしめ、而も之を遇するや美肉、錦繡、籃輿にのせて道に遇へば禮をなさしめた。又田樂の戲を好み諸將をして優人一人づつを養はしめた。かくて政を怠つたから綱紀紊れて人心次第に幕府を離れる様になつた。

二、後醍醐天皇 (1)北條氏討伐の御計畫 後醍醐天皇は人心が北條氏を離れるを察せられ、日野資朝・俊基等と謀つて政權を恢復せんとし、密かに諸國の武士を徵せられたに時利あらず早くも鎌倉に漏れたから、資朝・俊基は捕へられ鎌倉に送らるることとなりしが、人を鎌倉に遣はして書を高時に賜ひ異志なきを諭されたので、翌年俊基は赦されて歸り資朝は佐渡に流された。

(2)元弘の亂 高時は天皇が僧圓觀をして己を呪咀する由が聞えたので、元弘元年九一圓觀等を流し俊基を捕へて鎌倉へ送り、更に二階堂貞藤をして西上せしめ、天皇を廢して遠國へ遷し奉らうとした。此に於て天皇は夜神器を奉じて宮中を出でられ笠置山に行幸し寺を以て行在とせられた。此の時前天台座主であつた大塔宮護良親王の献策により、一は僧兵の向背を試み、一は敵兵の攻撃を緩うせんが爲に藤原師賢を天皇と稱せしめ延暦寺に行かせられたが、果して六波羅兵其の謀に陥り延暦寺を攻めた。然るに僧兵は眞の天皇に非るを知りて離散し、師賢等は笠置の行在に

奔つた、敵は遂に笠置を襲ふに至り天皇は藤房・季房等と共に逃れ、楠木正成の赤坂城に向はれた。御製「さして行く笠置の山を出でしより天が下にはかくれがもなし」藤房御返歌「如何にせん頼むかげとて立ちよれば尙袖ぬらす松の下露」やがて天皇は山城國有王山に至つて賊に追はれ給ひ、師賢・藤房と共に捕へられ六波羅より更に隠岐に遷され給ふ。其禮承久の時に比して頗る厚かつたが、觀る者感憤し歎聲巷に満ちたといふ。(兒島高德の事蹟を復習す) 高時は皇子尊良親王及藤房師賢等を流し、さきに御謀にあづかりし資朝・俊基等を殺した。

□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (1)北條氏は何故衰ふるに至つたか。(2)後醍醐天皇北條氏討伐の最初の御計畫は何うなつたか。(3)元弘の亂は何うして起つたか、其の結果は何うなつたか。(4)高時が後醍醐天皇を隠岐に遷し奉つたのは誰に倣つたのか。大逆無道を知らしむ。

#### 第四時 勤王の兵起る

□目的 楠木正成を始めとして勤王諸將の擧兵に就て授け、忠君愛國の志操を涵養するのである。

□方法、豫備 (1)前時分復習。(2)目的指示。

□教授 勤王の兵起る

(1)赤坂城の防戦 後醍醐天皇笠置山に幸して兵を近國に募られた時、河内に楠木正成あるを聞召し之に託するに復興のことを以てせられた。正成は「勝敗は兵家の常にして如何ともする能はざるも、臣にして死せずんば必ず陛下の爲に賊を滅し以て聖慮に答へ奉らん」と還りて赤坂に築城し天皇を迎へ奉らんとした。正成は河内の人橘諸兄の後裔で幼名を多聞丸といつた。頗る智謀秀でた人で其の赤坂に築くや、近國の兵は之を攻めたが抜くことが出来ない。笠置陥りて後も其の志益固く、笠置を攻めた賊將は皆河内に來つて赤坂を圍んだ正成謀を回らして大に敵を惱ました。城は方二町に過ぎざる小城で城兵僅かに五百、敵之を侮つて直に蟻集して來た

が正成矢石を發して防ぎ、賊軍死傷算なく又伏兵の急に起るに遇ひ大に潰走した。或は釣堀として堀を二重に造り、敵が四方の堀に手をかけて上らんとする時外堀を切り落し、上より大木大石を落しかけて苦しめ、或は柄の長さ一二丈もある長き柄杓にて熱湯を注ぎ等して容易に下らなかつたが、城中將に糧食盡きんとしたから正成は城を焼いて走り、元弘元年十月金剛山に據つた。北條氏は其の臣をして赤坂を守らせたが、翌二年正成赤坂を攻めて再び手に入れた。

(2)大塔宮の吉野擧兵 大塔宮は先に叡山にありて賊を防がれたが、遂に敗れて般若寺に逃れ初め蓋なき經本の箱に隠れられ、賊軍の過ぎし後又蓋ある箱に逃れて奇難を免がれた。賢明にして剛毅なる御方で、先に天皇の北條氏討滅の御計畫をされた時其の謀主であつた。親王は一たび南都に潜まれたが後赤坂に入られた。城陥るや從者十餘人と修験者となりて紀伊に下り、又十津川の奥に潜み遙に正成を通じて再擧を計られた。正成が再び現はれて赤坂を復するや、親王は十津川・吉野・紀伊等

伊豆國在廳北條遠江前司時政之子孫東夷等、承久以來、探四海於掌、奉喪如朝家之處、頃年之間、殊高時相模入道之一族、匪啻以武略藝業輕朝威、刺奉左遷當今皇帝於隱州、惱宸襟亂國之條、下灶上之至、甚奇怪之間、且爲加征伐、且爲奉成還幸、所被召集西海道十五箇國內群勢也、各奉歸帝德、早相備一門之輩、率軍勢、不廻時日、可令馳參戰場之由、依大塔二品親王令旨之狀如件、

還幸不致召集西海道十五箇國內群勢也、各奉歸帝德、早相備一門之輩、率軍勢、不廻時日、可令馳參戰場之由、依大塔二品親王令旨之狀如件、

大塔宮令旨 (藏寺山大郡石明國磨播)

伊豆國在廳北條遠江前司時政之子孫東夷等、承久以來、探四海於掌、奉喪如朝家之處、頃年之間、殊高時相模入道之一族、匪啻以武略藝業輕朝威、刺奉左遷當今皇帝於隱州、惱宸襟亂國之條、下灶上之至、甚奇怪之間、且爲加征伐、且爲奉成還幸、所被召集西海道十五箇國內群勢也、各奉歸帝德、早相備一門之輩、率軍勢、不廻時日、可令馳參戰場之由、依大塔二品親王令旨之狀如件、

大山寺衆徒中

左少將 定 恒 奉

大塔宮の令旨は、元弘二年六月より、同三年三月に至るまで、諸國勤王の兵を催促し、王政一統の基をなしたるものなり。ここに掲ぐるは、即ち六波羅追討を促したる令旨の一なり。在廳とは、國の介・掾等、任滿ちて後、その國に居住して、廳務を掌る家をいふ。北條氏の祖先は、伊豆に赴任したる後、北條に居住して、在廳の家となりたるなり。西海道十五箇國は、定まれる稱にあらざれば、たしかには知り難けれど、九州は、この内に入らず、山陽・山陰・南海の内、畿内に近き十五國に、この令旨を下されしなるべし。大山寺は、天台宗の巨刹、明石を距る東北三里許の處にあり。大塔宮、天台座主の資格を以て、特に令旨を此の寺に賜ひ、門徒を擧げて、勤王せしむ。本寺聲望の隆んなる、想ひ見るべし、左少將定恒は、家系履歴、詳かならず。

第十七 北條氏の滅亡

の兵を集めて吉野に旗を挙げられたのである。さきに親王が十津川より高野の方への途次敵陣の間を過ぎたるに、通過を妨げたる輩の請ふがまゝに餘儀なく錦旗を興へて難を免かれたが、村上義光奮戦して錦旗を奪ひ返して宮に追ひつき奉つたなどの美談がある。親王は吉野山に據り寺を以て城廓とし、令旨を諸國に傳へて勤王の兵を挙げしめられた。

(3) 吉野落城と千早の孤守 正成兵を天王寺に出し屢々六波羅勢を破つたので、高時大に驚き大軍を發して吉野・赤坂・千早に向はせた、千早城は正成が赤坂の地形の十分ならざるを見て更に金剛山中の地形を相して更に新築したものである。吉野に向つた賊將は、二階堂貞藤兵六萬、親兵を督して防戦すること七晝夜、偶々味方に叛く者あり敵を導いて城後より入り火を放つた。親王眉尖刀を提げて自ら出でて戦ひ七矢を身に被り退いて最後の宴を張らせられた時、村上義光(大手の木戸に戦つてゐた)馳せ來り親王の直垂鎧を賜はりて身代りとなつた。此の間親王は落ちられ

途中又賊にあはれたが義光の子義隆之に死し親王は高野に入られた、後赤坂城も落ち大軍大舉して千早城に向つた。總勢百萬騎と稱し、城の四方二三里が間は、尺寸の地も餘さず山野に充滿した。正成或は矢石大木を以て寄せ手を斃し、或は藁人形を作りて敵を誘殺し、或は炬火油を注ぎ敵のかけたる飛橋を焼き、千人に足らぬ小勢で善戦したので敵大に恐れ、持久の策をとり徐ろに糧食の盡くるを待つた。會々近卿の兵護良親王の令旨を奉じ敵の糧道を絶つたので、敵兵困しみ逃走相繼ぎ遂に圍を解いたのである。此の正成の千早城は實に天下の大運命を左右したもので、もし此の城にして早く落ちてゐたら何うであつたらう、赤松氏は起るを得ず、義貞尊氏も亦起る能はず、長年の船上山も或は無効であつたらう。實に之あるが爲勤王の兵は勃然として起つたのである。

(4) 諸國の勤王の兵起る 北條氏が天下の兵を舉げて、千早の一孤城を如何ともすること能はざるの報諸方に傳はり、加ふるに護良親王の令旨は飛んで豪族等をして

發奮せしめられたので、赤松則村先づ播磨に起りて兵を攝津に出し、土居通増、得能通綱等は伊豫に起りて水師を以て東上せんとするの勢を示し、肥後の菊池武時は義兵を擧げて少貳大友氏と戦ひ、勤王の士氣は大に振ふた。

□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (1)正成の擧兵について語れ (2)諸國勤王の兵の起つたのは何によるか。(3)正成の千早城が早く落ちたら何うであつたらう。

### 第三時 京都の恢復 鎌倉陥る 全課の復習

□目的 勤王の兵諸國に起るに至り遂に京都は恢復され鎌倉陥り、茲に北條氏亡び鎌倉幕府の倒れたる次第を授けるのである。

□方法、豫備 (1)前時分復習、(2)目的指示。

□教授 一、京都の恢復

(1)名和長年天皇を迎へ奉る 天皇は隱岐で諸國に勤王の兵の起れるを聞召し六、

條忠顯を従へられ船に乗られた。海邊に佐々木の追手に逼られたが、船主が志あるものとして天皇等を船底に隠し、さあらぬ體にて誑りて危急の場合を救ひ遂に伯耆に着御せられた。名和長年は一族二十餘騎で天皇を奉じ、船上山に據り糧食を運び大義を唱へた。翌日隱岐の守護佐々木清高等來り攻めたが、長年奮闘して之を破つたので近國の將士風を望んで來附するものが多くなつた。

(2)六波羅の陥落 天皇は六條忠顯をして播磨の赤松則村と共に京都を恢復せんことを命ぜられた。高時は之を聞き名越高家、足利高氏等をして西上せしめた。足利氏は新田氏と同じく源氏の子孫であるから、かねてより北條氏に屈服するを喜んでゐなかつた。當時高氏は父の喪に當れるに、北條氏は之を促して上京せしめたので深く憤り、乃ち此の機に於て宿志を果さんと、途上三河國から使者を伯耆の行在に馳せて給旨を請はしめ、素知らぬ顔して京都に向つた。時に正成は千早を固守してゐるから大に困つてゐる時に、俄に高氏の歸順に會ひ六波羅探題は大に狼狽した。



かくて高氏は忠顯、則村と道を分けて京都に攻め入り六波羅を落した。時に元弘三年五月七日、探題北條時益同仲時は光嚴院を奉じ、東へ奔らんとして時益は矢に倒れ、仲時は自殺した。

二、鎌倉陥る (一)新田義貞の鎌倉討入 六波羅が高氏によりて落ちた十五日後、同族たる義貞が鎌倉を陥れたるは奇といはねばならぬ。初め義貞は關東の命によりて西上し千早城を攻めてゐたが、大塔宮の令旨を受け病と稱して歸國し、遂に五月八日兵を上野に擧げた。東國の兵士來り集る者多く、義貞之を率ゐて武藏の國に迫つたが、鎌倉では大に驚き高時に部下の將をして之を防がしめたが皆敗れた、更に高時の弟泰家をして當らしめ、一旦大に義貞を破つたが三浦の兵義貞に來り屬するに及び義貞の軍大に振ひ、遂に鎌倉に入り十七日兵を三分して鎌倉を圍み、十八日大に激戦したが、一勝一敗の形勢であつた。義貞は一隊を分ちて、敵の背後をつかしめ、己は兵を率ゐて稻村崎を徒渉して由井が濱に出た。義貞自ら佩ける黄金作り

の太刀を海中に投じ「あはれ海神臣の忠義の心を愛で、潮を萬里の外に退け我三軍の道を開かせ給へ」と祈念したのは此處である。蓋し潮の干満を知らぬ上州兵に士氣を上げます爲めの奇智であつたであらう。かくて義貞の全軍鎌倉に入り高時は菩提寺たる東勝寺に入りて自刃し、一族の自殺する者又八百七十人の多きに上つた。

(2)鎌倉幕府亡ぶ 此に北條氏亡び、頼朝が征夷大將軍となつてから百四十二年間續い 鎌倉幕府も亦倒れ、將軍守邦親王は薙髮した、時に元弘三年五月二十二日一九九三年である。

□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (一)京都は如何にして恢復せられたか。(2)鎌倉は何うして陥つたか。(3)鎌倉幕府の倒れたのは頼朝が征夷大將軍となりてより何年目か。

□全課の復習 (1)北條氏と兩皇統の更立について。(2)北條氏が人望を收めた理由について。(3)幕府の衰運に向ひし原因について。(4)後醍醐天皇の御計畫と勤王

の兵について。(5)京都の恢復と鎌倉幕府の倒れし事について。

□挿畫 新田義貞鎌倉討入りの圖、義貞鎌倉討入りの時兵を三分し、自ら其の一軍を率ゐる夜道を海岸にとりて進んだ。本圖は其の有様を想像して描いたもので、圖中松林のある絶壁は稻村ヶ崎である。

### 第十八 建武の中興 (三時間)

□要旨 一旦王政に復りて親政の世となつたが、北條氏討滅の目的に對して尊氏は天皇の御意志に副ひ奉らず、却て源氏幕府再興の意志を遂げんとせし爲めと、大義名分を辨へざる當時武士の自利の爲めに動きし思想の錯誤が、中興の業を挫折せしことを明らかにするのである。

#### □教授上の注意

一、足利尊氏の恩賞厚かつたのは、大門閥家であつた爲勢力強大なりし結果事情やむを得なかつた當時の眞想を知らせる必要がある。二、中興の業が廢れたのは原因は多いが、要するに武人の心を満足することの出来なかつたのも主要なる點である。三、天皇の意は古の公卿政治となし、古の國司交代の制になさんとする

にあつたが、諸國の武士は幕府時代の守護地頭の制を其の儘にすることを希つてゐた。而も中央政府の基礎固からずして失政多かつたから、武士は益々不平であつたのである。尊氏は巧みに之を利用せることを知らせる。四、尊氏が護良親王及新田義貞を除かんとしたのは幕府創立に妨げとなるからである。親王の幽閉は天皇の御本意に非ざりしことをも明にする。五、當時の武士大義名分暗かつたとはいへ、皇家に一朝事ある際には忠臣の現はるるは我國歴史の氣隨である。即ち此の時ほど忠臣諸處に現はれて奮戦したことはない。之を了解せしめて我臣民の本分を覺らせるのである。

□教具 日本地圖、新田・足利兩氏略系、箱根足柄鎌倉地方圖。

□教材の區分 第一時、後醍醐天皇還幸、建武の中興。新政の弊害。第二時、新田氏と足利氏。第三時、尊氏の反。

#### 第一時 後醍醐天皇還幸、建武中興、新政の弊害

□目的 天皇還幸せられて後萬機を御親裁せられ、皇威再び振ひ天皇親政の古に復したことを授け、且つ新政其の當を得ざりし爲、天下再び亂れんとするに至りし事を了解せしむるのである。

□方法、豫備 (1)前時分大要の復習、(2)目的指示。

□教授 一、後醍醐天皇還幸

六條忠顯、足利尊氏等六波羅を陥ると共に之を行在所に奏上したので、元弘三年五月二十三日天皇船上山の行在所を發し途上より詔して光嚴院を退けられた。兵庫、西の宮に至りし時義貞より鎌倉の陥つたといふ報があり、一日を隔て、楠木正成、赤松等の奉迎を受けられた。天皇正成を召され早速の功偏へに汝が忠戦にありと賞せられ、命じて先驅たらしめ六月四日京都に入り五日宮城に還御せられた。元弘二年三月隱岐に流され給ふてから十六ヶ月を経た。

□挿畫

天童還幸圖 圖中の隊列は皇軍にして風箏を擁して入京せる所、千種忠顯の兵五百、高氏、直義の兵五千、宇部宮五百、佐々判官七百、土居得能 千、此の外諸國の大名等従ひ奉る、路傍に従者と共に跪坐せるは正成で、旗には菊木の家紋あり風箏の前に騎馬せるは判明せないが、藤原行房が藤原光守かの二人のうちであらう。

二、建武の中興 (1)記録所 久しく武家の私した政權も朝廷に歸つたので、年號

を改めて建武元年とし、廢れた儀式を再興、記録所に臨みて萬機を親裁せられ、「今の例は昔の新儀たり今の新儀は未來の舊例となるなり」と仰せられ、非常の御自信を以て政を聽かれた。

(2)雜訴決斷所 當時兵亂の後を承けて領地に關する訴訟が甚だ多かつたから、雜訴決斷所を置いて之を裁決せしめられた。

(3)關東奥羽の鎮 天皇は護良親王を征夷大將軍とせられたが、又新に諸國の國司を任じて地方の政治を整へられんとし、特に關東奥羽の重要なるを察せられ、北畠顯家を陸奥守とし、皇子義良親王を奉じて奥羽に鎮せしめ、尊氏の弟直義を相模守に任じ皇子成良親王を奉じて東國を治めしめられた、是に於て藤原氏擅權以來凡そ四百七十年の久しきに涉りて次第に衰へた皇威は再び振ひ、源賴朝幕府を開きしより百四十餘年間續いた武家政治は此に廢れて天皇親政の古に復した。世に之を建武の中興といふのである。此時に公卿から任じた地方官を特に國司と云ふ。

三、新政の弊害

(1) 論功行賞 中興の政はかく見るべきものが多かつたが弊害亦之に伴ふて起つた。足利尊氏は勳功第一として賞最も重く、其の名も元は高氏と書いたのを天皇の御諱尊治の一字を賜はりて尊氏と改め、次で武藏・常陸・下總(守護)の三國を與へられ、正三位參議に任せられた。

高氏がかく重賞を被つたのは大門闕て且つ勢力強大であつたことや、風貌の堂々たる所もあり、且つ此種奸臣の性格として外交術に長けてゐて、特に内奏等の効があつたからである。

新田義貞は越後・上野・播磨の三國(守護)を、楠木正成には攝津・河内(守護)を、名和長年には伊幡・伯耆を其れづ賞賜せられた。

然るに赤松則村の如きは早くより義兵を起し、殊に京都の恢復については功多かつたのに、始め播磨一國の守護に任せられ後故なくして僅かに佐用の一莊を賜はり、又肥後の菊池氏の如き、九州に於ける勤王の魁とも云ふべきに恩賞に洩れんとした

が楠木正成が菊池武時の死を悼みて其の勳功を奏上するに及んで、初めて賞せられた位である。而もさまで功勞もなき朝臣にして國司に任せられ、又は多くの莊園を賜はつたもの少からず、蓋し王政復古の結果朝臣を重じ武士を抑へんとされたのであらう。斯くの如く賞罰は或は情實により、或は賄賂により、或は内奏によりて左右せられたものが少くなかつた。

(2) 大内裏の造營 天皇は戦亂の後國民の疲弊甚だしきに拘はらず、諸國に課して大内裏を造營せられんとすの御事もあつたから、不平の聲が頻りに起つた。

(3) 武士の不平 賞罰の其の當を得なかつたこと、大内裏の御造營の事、裁判不公平にして内奏盛に行はれ論言爲に變じ所領を沒せられたこと。

公卿が復古に乗じて老功の武士を輕蔑し、且つ功なきも賞重かつた爲武士等は益々新政の己に不利なるを思ふに至りしこと等によりて不平を生じたのである、其の結果大義に暗く自利の爲勤王の兵を擧げた者は、中興の政を喜はず、却つて武家政治の昔を慕ふに至り天下將に再び亂れんとする様になつた。

□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (1) 天皇還幸の有様を語れ。

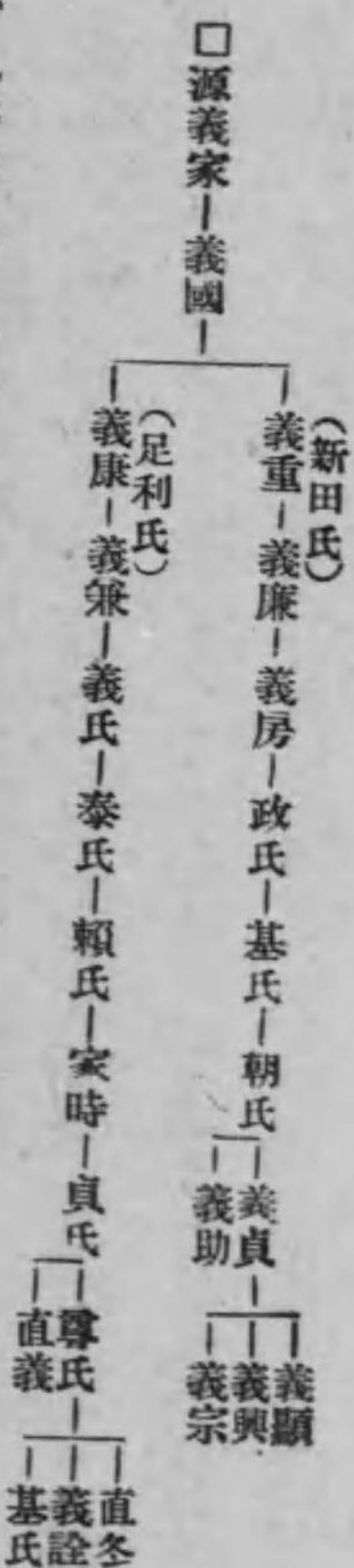
(2) 天皇は如何なる役所を置かれたか。(3) 地方の政治を整へ給はんとして何うせられたか。(4) 中興の業は何故失敗に歸したか。(論功行賞の不公平、公卿と武人と  
の反目、戦亂後の疲弊、大義名分に暗かりしこと等)

第二時 新田氏と足利氏

□目的 新田氏と足利氏との系統を授け、足利氏の武士の間に重きをなすに至りし次第を知らせるのである。

□方法、豫備 (1) 前時分復習。(2) 目的指示。

□教授 新田氏と足利氏



(1) 新田足利兩氏の家系—兩氏は義家の子義國より出で、其の子義重は上野の新田

にありて新田氏を稱し、其の弟義康は下野の足利にありて足利氏を稱した。新田氏は代々幕府に屬してゐたが、其の關係疎遠にして隨ひて一族世に顯はるゝこと少かつた。足利氏は常に幕府に親しみ、殊に屢、北條氏と婚を結びて勢望甚た高く、鎌倉に於ても北條氏に次いでゐた。されど足利氏は内心に於て己れ源氏より出でながら家來筋なる北條氏の下に立つを憚しとせず、尊氏の祖父家時の如きは八幡宮に、我命を縮めて三代の中に天下を得しめ給へと祈りて、切腹したと傳へられてゐる。

(2) 尊氏の野心—元弘の亂起るや、尊氏頼朝を手本とし密に北條氏に代りて源氏の幕府を起さんとする志あり、即尊氏の歸順は其の野心を果さんが爲で、高時の命により西上し丹波に至り旗を擧げて六波羅を陥落せしめ、細川和氏をして東下して鎌倉を收めさせた。和氏が鎌倉に行つた時には已に義貞の鎮定した後であつた。和氏事によりて義貞と衝突し尊氏の子義詮と共に之と相戦はんとした。此のとき關東の將士は尊氏が京師に於て勢力あるを聞き、多くは義貞を去つて義詮・和氏に歸したの

で、義貞戦ふこと能はず和を請ふて西上する様になつた。足利氏の聲望の盛なることは之でも分るのである。此に於て尊氏は義詮を鎌倉に置いて將士の心を收攬した。天皇還幸の後は直義成良親王を奉じて來り鎮したので、東國の大勢は已に此の時に足利氏に歸したのである。尊氏は野心を達せんとし、當時不平を抱きし武士を招き(食はずに賞與を以てす)。或は内奏等によりて己れの爲をはかる等、其の準備に着手したのである。

(3) 護良親王を弑し奉る。尊氏が目的を達せんとするに、第一に妨げとなるべきは親王と義貞とである。故に尊氏は之を除かんとしたのである。護良親王は尊氏の異圖あることを最も早く見破られた方で、早く之を誅して禍亂を未發に防がんことを請はれたが、天皇は尊氏を憚りて之を許されなかつた。其の後親王が尊氏を圖り給ふなどの風評があつたが、尊氏は親王募兵の書を得て之を證とし、頻りに天皇に訴へて曰く、「親王の兵を徴するは陛下の叡慮に出でて、臣を討せんとし給ふにあるべ

し」と又天皇の寵姫廉子によりて密に親王を讒奏した。此に於て天皇迷ひ又已むを得ずとなして親王を鎌倉に下して直義付し、尊氏討伐の事は決して天皇の御意志に非ることを示された。嗚呼賢明にして剛毅なる此の親王を、京都より逸せられたことは已に皇家の御衰運を示し蛟龍之より水を失ひて復起たす、實に千載の恨事といはねばならぬ。建武の中興は大半此の親王によりて成り、其の業は亦親王の細没落と共に廢るといふも過言ではないのである。直義は親王を鎌倉の東光寺に幽し奉つた。直義北條時行の亂に遇ひ之を拒ぐこと能はず、後難を恐れて淵邊義博をして、親王を弑し奉らんとした。義博乃ち親王の幽所たる土牢(土窟に非ず今の土窟の如きもの)に至り燭により佛書を読まれてゐた親王を刺し奉らんとせしに、刀を一寸ばかり嚙折られ副刀を抜いて拭し奉つた。御年二十八、義博其の御面を見て身震ひをなし附近の藪に投じて去つたといふことである。鎌倉の宮は親王を祀る。(明治二年)此に於て東國の大勢は愈、足利氏に歸するに至つた。

□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (1)足利・新田兩氏の系圖に就いて語れ。(2)兩氏何れが勢力があつたか、足利氏の方が勢望の大であつたのは何故か。(3)尊氏は如何なる野心があつたか。其の目的を達せんとする上に妨げとなるは何人か。(4)天皇が護良親王の御謀(尊氏討伐)を許されなかつたのは何故か。もし親王の御意志を容れられたら何うであつたらうか。

### 第三時 尊氏の叛

□目的 尊氏の謀反せし次第を授け、大義名分の明かにすべきことを知らせるのが其の主眼である。

□方法、豫備 (1)建武中興の業の廢れんとしたのは何故か。(2)足利氏は何故新田氏より勢力強大であつたか。足利氏は如何なる野心があつたか、尊氏は其の目的を達せんが爲何うしたか。

### □教授 尊氏の反

(1)北條時行の亂 高時の子時行、父の死せし時尙幼少であつたが、難を信濃の諏訪に避けてゐたが建武二年兵を此の地に擧げ、兵五萬を得て鎌倉に迫つた。直義之を防いで破れ、護良親王を弒し奉つて西上し、軍を矢矧に止めて京都に奏した。此に於て時行は鎌倉を占領した。

(2)尊氏鎌倉によりて反す 尊氏は此の報を得て自ら往きて之を討ち征夷大將軍諸國總追捕使たらんことを奏請して許されず、遂に尊氏は命を待たずして東下した。天皇は時行討伐の事のみを許し、尊氏を征夷將軍に任せられ其の他は許されなかつた。尊氏矢矧で直義と會し鎌倉に入つて亂を平げた。時行亂を起して二十日に敗れたので之を二十前代中前代ともいふのである。前代とは足利氏の前の意、中とは北條・足利の中の意である。天皇は遙に其の功を賞して從二位に叙し、召還せられたが恣に鎌倉に留りて歸らず、自ら征夷大將軍東國管領と稱し厚く部下を賞し、降附の將士を撫恤したから人心多く之に歸向した。尊氏乃ち反し義貞を誅するを名として

兵を募つた。即尊氏が目的を達するに護良親王と新田義貞とが最も其障害であつた、蓋し義貞の功大にして誠忠なれば茲に兩雄並び難く、義貞追討の宣旨を請ひ兵を募つたのである。

(3) 義貞の尊氏征討 〓 さきに護良親王を弑し奉り、今又此の舉に出たので天皇も遂に嚇怒せられ、尊氏の官爵を削り義貞をして尊良親王を奉じて討伐せしめられ、又北畠顯家をして義良親王を奉じて陸奥より襲ひ來らしむべく傳へられた。

尊氏は十八萬にて相模竹の下に向ひ、直義は六萬にて箱根に向つたが、官軍も二分し義貞は七萬を以て尊氏と戦ひ、弟義助は親王を奉じ七千を率ゐて直義と戦つた、義貞は竹の下の戦に大に尊氏を破つたが、弟義助の軍大敗したので全軍敗れ義貞は京都に引返した。此に於て東國の將士は益、賊に加はり其の勢大に振つた。而も此の時播摩の赤松則村等も叛いて尊氏に應じ、將に東西より京都に攻入らんとしたのである。

(4) 京都の戦 〓 此に於て義貞は淀を、長年は勢多を、正成は宇治を守つたが、赤松等の兵西より京都に入るに及び皆敗れ、天皇は叡山に幸せられた。さきに還幸せられてから僅かに一年八ヶ月である。

(5) 尊氏西走 〓 さきに命を拜してゐた顯家は兵を率ゐる鎌倉を襲ふたが、尊氏等既に發した後であつたから之を追ひつゝ京都に達した。官軍勢を得てよく賊勢をくじき糺の森で大に賊を破つた。尊氏兵庫に入り大内氏の援兵を得て、義貞正成の軍と打出濱に合戦したが遂に敗れ舟に乗じて西國に走つた、此に於て天皇還幸せられた時に一九九六年(延元元年)正月である。是より中興の業廢れて天下の大亂となるに至つたのである。

□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (1) 尊氏は何を動機として反旗を翻したか。(2) 朝廷は誰をやつて討たせられたか、何うなつたか。(3) 京都は如何にして賊軍の手より恢復せられたか。(4) 建武中興の業は如何にして廢れる様



になつたか。

□備考 Ⅱ 京都の戦で正成の面白き謀がある。尊氏が京都に入るや其の侍杉本佐兵衛といふ泣男をして大に泣がしめ、正成義貞等々死すとて僧二三十人を附して此處彼處の戦場に其の屍を求めしめた。其の夜正成松明二三千を燃し叡山の兵が次第に落ち行状を示した。尊氏等は之を信じ、正成義貞に似た首を獄門の木に懸けさらして安心してゐた所に、翌朝官軍に不意に攻められたので大狼狽をなし潰亂したとのことである。

### 第十九 吉野の朝廷 (五時間)

□要旨 建武中興の業を挫折せしめたるは、全く尊氏の私慾の然らしめたることを審にし、之を機會として忠臣の人々の赤誠が現はれたこと、當時ほど顯著なることなき(別格官弊社の數)を知らしめ、親子兄弟の節を變せざりし點に留意せしめ、以て忠君の至情を涵養するのである。

#### □教授上の注意

一、尊氏の如きも朝敵の名を恐れて常に之を避けんとしたが、遂に院宣を請ふに至りし所以を知らしめ、我

國體の尊嚴なること、即如何なる英雄も天皇に敵するを憚る所以を知らせ、且つ持明院統は常に武家に御親軍であつたことも附説する。二、淡川の戦の重大であつた所以を推究させ、楠氏の忠節に就いては深き感動を興へ且つ正成誠は忠なるのみならず智謀ありて毅然たる偉丈夫であつたことを思はせ大に敬慕の念を起させる。三、淡川の戦、四條堰の戦、筑後川の戦等劇烈なる状態を活寫して其の意氣を忍ばせねばならぬ。四、南北兩朝の媾和成りて父子の禮を以て神祕を授せられ、皇統一に歸した以上は決して南北朝の如何を其の間に挟むべきものではない。五、尊氏が幕府を創立した事情を頼朝と比較し、前者は故意なる傾きあるに反し後者はや、自然たる所あり、而も尊氏は將士を其の部下に招きたる事情は多くの賞を與ふるを以てし、頼朝は父祖以來の恩に感じた武士が自然に憤起して擁立する所となつたので、頼朝の幕府創立は根底あるに反し尊氏の幕府は將來に於ける威權立たず、且つ皇室に於ける罪は頼朝より遙かに許し難きことを了解させる。

□教具 南北分屬圖、戦地を指示するに都合よき地圖、諸忠臣の肖像圖。

□教材区分 第一時、正成・長平等の戦死。第二時、吉野遷幸。義貞顯家等の戦。第三時、官軍の形勢。第四時、京都の形勢。第五時、京都遷幸、全課復習。

第一時 尊氏京都に入り正成忠顯長年等戦死す

□目的 尊氏入京諸忠臣の奮闘の有様を授け、壯烈を忍び誠忠に感せしめ且つ之を敬

慕せしむるのである。

□方法、豫備 (1)建武中興の業は何故に廢れたか。(2)足利氏は如何なる野心を以てゐたか。(3)何を動機として反旗を翻したか。(4)京都の市街戦の結果尊氏は何うなつたか。(5)目的指示。

■教授 一、尊氏京都に入り正成・忠顯・長年等の戦死

(1)多々良瀆の戦 尊氏が京に入るや、常に朝敵の名を負ふを遺憾とし、光嚴院の院宣を請ひ備後で之を得て大に喜び錦旗を掲げて下つた。其の九州に下るや少貳頼尙先づ之を迎へたが續いて鳥津・大友の諸氏も多く來附した、此の時肥後で菊池武敏あり、父武時の志を繼いで勤王の軍を起し、阿蘇惟時と共に筑後に向ひ、大友少貳の兵を破り頼尙の父を殺し太宰府を陥れ、勝に乗じて博多に出で多々良瀆の南方の小川を越え、松原を後にして六萬の大兵を擁し北に向つて陣を張つた。尊氏は箱崎に陣し直義をして大手の軍を破らせた。武敏之を耻ぢ引返して奮戦し其の

鋒頗る鋭かつたので、直義死を期して其の片袖を尊氏に送つたといふことである。然るに尊氏等進むに及び武敏負傷し殘兵を收めて走つた。此の戦は實に重大なる戦でもし武敏が勝つてゐたら何うであつたらう。尊氏の運命も亦知るべきである。菊池氏敗るるや九州の諸將風を望んで賊に加はり尊氏大舉東上せんとした。

(2)湊川の戦 尊氏は更に赤松等の中國勢、細川・河野等の四國勢を合し、次いで高師直と共に水軍を、直義高師泰等と陸軍を率ゐて並進し、直義は義貞の部將の守れる福山城(福山市)を陥れた。時に義貞・義助は則村を播磨の白旗城に圍んでゐたが急を聞き兵庫に退いて戦況を奏上した。朝廷大に驚き、正成をして義貞を助けしめられんとした。正成は此の時「敵新に九州の精兵を持して來る其の勢當るべからず、車駕暫く叡山に幸し敵を京師に入らしめ、臣は河内の兵を以て其の西國の通路を絶つて狭撃せば勝たんこと必せり」と參議清忠曰く「本年車駕已に一たび叡山に幸せり、今亦敵を見ずして叡山に幸する如きは兵氣を沮するなり」と天皇は之に從

はれた。此に於て正成は西し櫻井驛に至り子正行(十一歳)をかへして進み兵庫に至つた。時に義貞は全軍を統べて和田岬に屯した。兵二萬五千、義貞と正成との陣遠く隔て、兵庫の船着には敵軍を支ふるものがない。故に敵船六千和田岬に漕ぎよせ同時に上陸して義貞と戦つたが義貞之を破つた。正成は七百餘騎を率ゐる湊川に陣し直義の五十萬騎と戦ひて之を破り須磨の方へ退かせた。時に直義馬を射られ危急に迫るや其の部下薬師寺某身代りとなり僅かに免かるゝを得た。尊氏之を聞き六千を出して援はしめ、正成・正季の兄弟三時間に十六回まで戦ひ、次第に兵を失ひ已に七十三騎を餘すのみとなつた。正成猶奮闘したが遂に力盡き湊川の北なる一村に入り鐘を脱し身を檢するに切創凡そ十一箇所であつた。一族十三人郎黨六十餘悉く自殺した。正成正季に向つて「何が最後の願なる」と、正季笑つて「願は七度人間に生れ朝敵を滅さん」と正成「我もさう思ふなり希くは生を替へて此の本懐を達せん」と兄弟刺し違へて死んだ。正成年四十三。後三百六十年を經元祿五年徳川光圀「鳴

呼忠臣楠子之墓」の碑を建て明治元年朝廷祠を碑側に建て、之を祀られ、五年別格官幣社に列し十三年正一位を贈られた。

(3)延暦寺の行幸 義貞も奮戦闘し遂に其馬斃れ既に危き所を、小山田高家の馬に乗りて辛うじて亦京師に還つた。此に於て天皇叡山に行幸された。

(4)忠顯・長年等の戦死 尊氏は遂に京都に入つた、時に延元年五月、尊氏が京都に敗れてから四箇月間である。官軍は尊氏等と戦つたが常に利なく六月直義叡山を攻めた時六條忠顯は戦死し、六月三十日義貞、長年京都に入り尊氏の本陣東寺に迫らんとしたが亦利あらず、長年は三條で討死し、義貞は逃れて叡山に歸つた。長年は後伯耆國名和神社に祀られ、明治十一年別格官幣社に列せられ從三位を贈られた。

□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (1)尊氏が九州に下つた時誰が之を防いだか。(2)尊氏が西國でかくも大勢力を得たのは何故であらうか。(尊氏の門閥、京都鎌倉に於ける以前の聲望、光嚴院の宣旨、多々良濱の勝戦等である)

- (3) 湊川の戦は何うして起つたか。(4) 忠顯・長年等は何うして討死したか。
- (4) 尊氏に對して官軍は如何なる策戦をしたらよかつたであらうか。

第二時 吉野遷幸、義貞・顯家等戦死す

□目的 尊氏僞りて降り神器を光明院に傳へられんことを奏請するに當り、天皇吉野に遷幸せられしことを審にし、義貞・顯家の戦死につきてを授け、官軍の不振するに至りしことを了解せしむるにある。

□方法、豫備 (1) 西下せる尊氏が勢を得て京都に入るまでの重大なる戦は何か。

(2) 尊氏の京都に入るや誰が戦死したか。(3) 猶生き残つてゐる官軍の將には誰があるか、天皇は何處に御座るか……目的指示。

□教授 一、吉野遷幸

(1) 尊氏光明院を擁立す 尊氏は賊名を避けんが爲、持明院統の光嚴院の御弟豊仁親王を擁立して天皇と稱した、之を光明院といふ。

□尊氏の如き者も常に朝敵となるを避けんとし、さきに鎌倉に依りて反せんとするや、家を出でて建長寺に入り誓を切りて敢て王師に抗せざるの意を示し、事を直義に委し又世事を知らざるもの如くであつた。又九州に奔らんとするや光嚴院の院宣を請ひたるが如き、たとひ策の爲めに此の體をよそひしとはいへ之れ我國體の然らしむる所で、尊氏と雖も絶対に皇室に反抗することは出来なかつたのである。

(2) 天皇の京都遷幸 兩軍數月間に亘り戦闘を交へたが、十月叡山糧少きを觀取せる尊氏は僞り降り天皇の還幸を奏請したから、天皇やむを得ず之を容れて京都に還幸せられた。尊氏は乃ち天皇を花山院に幽し奉り供奉の公卿の官爵を奪ひ、又神器を光明院に傳へられんことを請ひ奉つた、天皇はやむを得ず偽器を授けられ、十二月二十一日夜婦人の衣を被り私に神器を奉じて花山院を出で吉野に潜幸せられた。

(3) 吉野の朝廷 天皇吉野に行在を作りて四方に號令せられた、實に紀元一九九六年<sup>延元</sup>十二月である、世に吉野の朝廷を南朝といひ、尊氏の擅に立てたるを北朝といつてゐるが正當なる語でない、即光明院等は正統の天皇でないからである。是より戦亂相繼ぐこと五十七年間である。

## 二、義貞・顯家等戦死す

(1) 金崎城の陥落 〓 初め天皇尊氏の請を容れ京都に還幸せられんとするや、已に尊氏の權略なるを觀られ、義貞をして皇太子恒良親王及皇子尊良親王を奉じて北國を經營せしめられた、此に於て義貞は皇太子等を奉じ途上大風雪に苦しめられたが、越前敦賀瀬頭なる金崎城に入るに及び、弟義助をして柚山城で兵を募つた、尊氏は高師泰をして金ヶ崎城を攻めさせたので、延元元年二月義貞は潜かに柚山に至り救を求めた城將爪生保兄弟は直に之を救はんとして途上師泰と戦ひて戦死した(保の二子を失ひ、謠を歌ひて將士を勵ましたのも此の時) 金崎城はかくして孤立無援となり、義貞の子義顯は先づ切腹して手本を示し尊良親王其の刀を取り遂に御自害あらせられ、伊豫の土居通増、得能通綱も殉死し此に城は陥落した、皇太子(十四歳)は捕へらる。賊宮に義貞の行方を問ひ奉つた時、皇太子は之を欺いて「昨日暮義貞兄弟自刃し従者屍を焼けり」と、已にして其偽りなるを知り京都に歸るや毒を進めて弑し奉つたのである。

(2) 義貞の戦死 〓 其の後義貞は柚山城に起り、屢々賊將足利高經を破り諸處を抜いたので勢漸く盛ならんとしたが偶々高經の軍と藤島に遭遇した、敵三百騎、義貞五十騎而も敵は楯を以て防ぎ且つ亂射したので義貞の馬五矢を蒙りて澤中に倒れた、義貞起たんとするや矢飛來り額に中つたので義貞遂に自盡した、時に年三十八。後萬治三年越前侯松平光通碑を立て、「新田義貞戦死此處」と記した、明治九年朝廷正三位を贈り藤島神社に祀つて別格官幣社に列し十五年更に正一位を贈られた。四十二義貞の子義顯、義興、義宗の三人に従三位を贈られた。今は福井市に移る。

(3) 顯家の戦死 〓 顯家が尊氏を京都に破つて西走せしめた時東國や、亂れたので、義良親王を奉じて行つて治めしめられた、然るに天皇吉野に遷幸せらるるや上京せんとし、途中鎌倉を攻めて義詮を破り美濃・伊勢に轉戦し奈良に入り將に京都を恢復せんとする勢を示した、尊氏之を恐れ將をやつて之を防がしめた、顯家兵少く日

疲勞甚しき爲奈良に破れ天王寺に破れ河内に走り、賊將高師直等と和泉の石津に戦つて戦死した。(親王は吉野に赴かる)時に延元三年五月、年二十一。

□後醍醐天皇其の功を賞し従一位右大臣を贈られ、明治初年阿倍野に父親房等と共に之を祀つた、即阿倍野神社で十五年別格官幣社に列せられた、岩代でも靈山神社を立て親房顯家等を祀つた、十八年別格官幣社に列せらる。

□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (一)尊氏が光明院を擁立したのは何故か。(二)天皇が尊氏の請を容れ京都に還幸せられた事情を語れ。(三)天皇は何うして吉野に遷幸されたか。(四)義貞の北國經營に就いて語れ、金崎城は如何にして陥つたか。(五)顯家は如何にして戦死したか。

### 第一時 官軍の形勢

□目的 後醍醐天皇の崩御に就て授け、且つ正行・親房・武光の勤王に就いて知らせるのである。

□方法、豫備 (一)前時分復習。(二)かくして官軍の諸將多く歿したが、之から吉野

の朝廷は何うなるだらう……目的指示。

### □教授 官軍の形勢

(一)後醍醐天皇の崩御と後村上天皇御即位 官軍の諸將多く歿して吉野朝廷は勢益々振はざる中に、天皇は京都恢復の御志も達せられず吉野に崩御せられた、其の時「骨はたとひ南山に埋もるとも心は常に北闕の天を望まん」と仰せられた、時に御年五十二、延元四年八月。此に於て義良親王即位せられ之を後村上天皇と申す。

□さきに顯家善良の戦死により官軍の勢衰へたから、結城宗廣の議により皇子か地方に分遣して勢力の恢復を謀つた、即義良親王は奥羽に、宗良親王は東國に、花園宮は四國に、懷良親王は九州に赴かれた、此の中で義良親王は宗良親王と共に吉野を發し伊勢に至り舟師を整へ大湊を發したるに、海上颶風に遇ひ宗良親王は遠江に親房は常陸に、其の子顯信は義良親王と共に伊勢まで吹返されて篠島に着し、次で吉野に還り皇太子となられてゐたのである、其の即位さるるや正行、武光及親房のあるなり、加之懷良・宗良等の諸親土の王事に盡されるあり、官軍漸く振はんとした。

(二)楠木正行の京都守護 正行は年十一にして父に櫻井驛で別れ家に歸つたが、尊

氏正成の忠誠に感じ其の首を河内に送るに及び、正行悲しみて自殺せんとし母に御せられた、延元三年正行兵二千を以て吉野を守るに及んで衆心漸く安んじた。

尊氏細川顯氏をして三千餘を率ゐて之と藤井寺に戦はせたが、正行森影より其の不意を襲ふて大に之を破つた、尊氏は更に山名時氏をして顯氏と共に六千を以て正行を討たせたが、正行は二千を以て直に時氏の本陣(瓜生野の東)を衝き大に之を破り天王寺に追ひ、安倍野の敵軍をも大に惱ました。

(3) 懷良親王と菊池武光 征西の宮懷良親王は九州に下らるるや、菊池氏の一族之を八代に迎へ奉つた、夫の明使が太宰府に來り朝貢を促したのを斥けられたのも此の宮である。

菊池氏は武時勤王の旗を擧げて以來一族悉く王事に盡したのである。

□藤原隆家……十二代……武房―隆盛―武時―  
武重  
武敏  
武光―武政―武朝

(4) 宗良親王 征東將軍となり遠江井伊谷城にありて勤王の兵を募られた。

(5) 北親房の歸來 親房はさきに義良親王を奉じて海上に風に遭ひ常陸に漂着するや、小田城に入り力を東國の經營に注いだ、親房は奥羽地方を從へて大舉官軍の勢を恢復せんとの意志であつたが、賊將足利師冬小田城を攻むるに及び城陥り、親房は更に關城に入つたが後之も陥り遂に吉野に歸つた、此の六ヶ年諸將を誘ひ等して經營頗る力めたが遂に東國の官軍振はぬ様になつた、彼の職原抄と神皇正統記とは此の間に書いたもので、後者は吉野朝廷の正統なることを説き勤王の軍の士氣を鼓舞せんとしたものである、親房が吉野に歸つて後は柱石の臣として輿望を一身に集め朝政に參し大に畫策する所があつた。此に於て官軍復漸く振ふた。

(6) 四條畷の戦 正行先に細川・山名兩氏を破つたので、尊氏大に恐れ高師直・師泰をして之を討たしめた、正平三年正月師直は和泉の堺浦に、師泰は河内の佐々良に屯した、正行は弟正時等百四十人と死を誓ひ先づ吉野の行宮に至り、後村上天皇に

別を告げ奉り先帝の御陵に拜辭し、一族將士の氏名を如意輪堂の壁にかき「かへらじとかねて思へば梓弓なき數に入る名をぞ留むる」の歌を殘し四條畷に向つた、師直五萬を五つに分け己は二十餘町の後方に陣してゐた、正行兵三千直に其の本營を衝き奮戦又奮戦、遂に師直と相距ること半町正行躍進して突入したので、師直の危急に迫るや上山高元之に代つて戦死したので本意を遂げず、正行は膝・頬等に負傷するに及び弟正時と共に刺違へて死んだ、時に年二十三、自餘の三十二士皆殉じた、時は紀元二千八年正平三年である。

◎明治九年從三位を贈り二十二年四條畷神社は別格官幣社に列し二十年從二位に進められた。

(7) 天皇賀名生に避け給ふアナフ師直は之に乗じて行宮を犯さんとしたので、天皇難を賀名生に避けられた、師直火を放つて皇居邸宅を焼いた。

(8) 筑後川の戦ア四條畷戦後明治官軍の柱石北畠親房が賀名生で薨じた年六十三。六年四十一年正一位を贈らる。

此に於て官軍勢大に衰へたが只九州で征西府大に振ひ溜飲を下げるものがあつた。是より先懷良親王は肥前・肥後・豊前に出征せられたが、正平十三年には探題直色を走らせたので、小貳大友一度降つたが又叛いた、十四年武光親王を奉じ八千を率ゐ少貳頼尙を討たんとし頼尙六萬の大軍を以て筑後川を挟んで對陣した、武光川を渡り頼尙を追撃し夜半水聲に應じ敵に突入して大に破り、夜明くるに及び武光親王と共に三十餘騎を率ゐ大呼頼尙の中堅をついた、矢雨の如く親王も身に三創を蒙つた武光人に先じて奮闘し敵に當ること十七合、馬傷き胃は裂けて地に落ちた、此の時一敵將來り迫るに及び相共に落馬し、武光敵の首を斬りて馬を奪ひ其の胃を被り、又奮戦したので敵軍大に敗れた、此の戦で敵の首を得ること三千二百、武光の軍死するもの千八百、武光は乃ち兵を收めて歸つた、武光の子武政其の子武朝皆父祖の志を繼ぎて王事に盡した、明治十一年菊池神社を別格官幣社に列し、三十五年武時に從一位を、武重武光に從三位を、四十四年武政武朝に從三位を贈られた。



□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (1)後村上天皇の御即位後官軍が振ふたのは何故か。(2)然るに官軍の衰ふるに至つたのは何故か。

第四時 京都の形勢

□目的 吉野の朝廷の衰へた後もなほ勢力を維持し得たるは、京都にて賊徒の内訌ありしが爲である、即尊氏等兄弟君臣の争を知らしめ、且つ尊氏の政策の大要を授けるのである。

□方法、豫備 (1)尊氏は何故に反したか。(2)尊氏が九州より東上し京都に入るに及んで何うしたか、何故光明院を擁立したか。(3)後醍醐天皇崩後官軍の形勢は何うであつたか。(4)官軍が衰へた後も尙大勢を支へ得たのは何故であらうか。(目的指示)

□教授 一、京都の形勢

(1)尊氏兄弟の不和 京都に在つては尊氏擅に幕府を開き、政務を直義に委ねてゐ

たが、尊氏の部將高師直行等を亡ぼして功益々顯はれ幕府の執事となり勢頗る盛で此に直義と隙を生ずる様になつた、直義遂に師直を殺さんとして師直を招くや、師直之を知りて逃れ、弟師泰の河内にあつたのを招き山名・細川・今川等を率ゐた直義を討んとした。直義一時尊氏の邸に隠れ師直大軍を以て尊氏の邸を圍みて直義を訴へたので、尊氏已むを得ず直義の政權を奪ひて子義詮に授けて一たび解けた、然るに直義黨の西國にありて兵を擧ぐるや、師直尊氏を奉じて先づ直義を殺して西征せんとしたのを直義之を知り脱走して官軍に降つた、官軍大に勢を得て京師をとり義詮を走らした、尊氏、師直之を聞き備前より歸りて御影濱で直義と戦つたが大敗し師直兄弟剃髮して降つた、直義黨は遂に之を殺した、直義と尊氏の和成り直義は此に官軍を棄てて舊の如く政務を執つた、直義がさきに降服したのは一時の窮策に過ぎなかつた。之より直義の勢益々振ふに至り、義詮之を喜ばず尊氏も之を惡み、遂に之を討たんとし近江に戦ひて破つた、直義鎌倉に走り已にして又兵を集めて西

上し、尊氏と駿河に戦ひしも利なく遂に尊氏に殺された。

尊氏が直義を討たんとするや、官軍が其虚を衝かんことを恐れて偽はりて降つたから、天皇之を許して男山に還幸し義詮を走らして一時京師を收めた。

(2) 尊氏・直冬父子の争い 尊氏は庶長子直冬を直義の養子としてゐたが、直冬は中國探題として備後にあり、常に養父直義を援けて尊氏帥直を戦つてゐた、已にして直義殺さるるに及び直冬は直義黨の山名時氏等と官軍に降つた、已にして直冬等兵を擧げ、九年十二月京都を攻め尊氏を近江に奔らせた、(官軍三度入京)翌年直冬尊氏と戦つて敗れ京都を棄てた。

(3) 諸將の反覆 さまに直義の殺さるゝや、其の黨上杉・畠山等は新田氏(義貞子義宗・義興等)と結び尊氏に反抗した、其他尊氏の諸將反覆するもの多く、大内氏の如きは反覆して山陰・山陽十一國を領するに至り世呼んで六分一殿といつた、其他仁木・細川・足利(高經)等皆一時反覆した。

(4) 義詮光嚴院を擁立す さまに尊氏の直義を討たんとして降りし時、後村上天皇男山に還幸して京都を收め暫く海内を統一せられてゐたが、義詮再び京都を攻めて之を取り進で天皇を男山に圍んだ、楠木正儀等奮戦したが糧盡くるに及び、天皇自ら甲冑を召され乗馬せられて出で、賊軍の急追に遭ひ辛うじて賀名生に還られた、此に於て義詮は擅に光嚴院の御子彌仁王を擁立して天皇と稱した。之を後光嚴院といふ。

(5) 尊氏の政策 十三年尊氏五十四歳で歿した、初め尊氏の皇族を擁立するや、皇室の御争ひの如く装ひて人心を籠絡し陽に之を尊びて専ら私利を圖つた、其の凶逆永く後人の指彈する所である、即君に不忠、兄弟に不友、而も主従常に不和なりしに至つては道德の觀念の如何に薄かつたか分る。

□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (1) 官軍の衰へた後も猶大勢を支へることの出来たのは何故か。(2) 尊氏直義兄弟の不和は何うして起つたか。

(3) 尊氏の部將で叛くもの多かつたのは何故か。(5) 京都の内訌は數、官軍を利したが何んなことがあつたか。初め直義、尊氏師直と争ふて降つたこと、正平六年尊氏直義を討んが爲降つたこと、七年天皇賀名生を發して男山に着し、楠木正儀等の官軍が京都を收めたが之より正平十六年まで四度入京したこと。(6) 義詮は誰を擁立したか。(7) 尊氏の政策は何うであつたか。(8) 尊氏は何んな人か。

□ 尊氏は極悪無道にして不倫の行多き人であるが、而も常に朝敵の名を恐れてゐたこと、僧疎石の勳によりて醍醐天皇の冥福を祈らんが爲めに、巨萬の財を投じて嵯峨に天龍寺を建立したことは尙良心の苛責のあつたことがうかがはれるので、是も我國體の然らしむる所である。

#### 第五時 京都遷幸、全課の復習

□ 目的 後龜山天皇義滿の請をいれられて京都に還幸し、神器を後小松天皇に傳へられた次第を授けるのである。

□ 方法、豫備 (1) 前時分復習。(2) 目的指示。

□ 教授 京都遷幸

(1) 官軍の衰微 官軍は京都の内訌により賊の降將ありし爲屢々賊勢を殺いたが、降將も忠誠の爲にはあらず只一時の策の爲であつたから、義詮の之を好遇するに及び皆京都 歸り此に官軍は日に衰微した。

(2) 義滿家を繼ぐ 京都では義詮の後義滿家を繼ぎ、細川頼之の輔佐するに及び勢力益々張つた。

(3) 後龜山天の京都遷幸 義滿大内義弘の議を納れ和を講はしめて曰く「車駕京都に還り神器を後小松天皇に譲り給はば兩統の更立は舊に依らん」と、天皇兵戰の久しきに及んで萬民を苦しめるを慮りて其の請を許され、元中九年十月二十八日神器を奉じて行幸の儀を以て吉野の行宮を發し、閏十月三日大覺寺に入御關白以下百官皆従ひ奉つた。

(4) 神器を後小松天皇に傳へ給ふ 五日天皇父子の禮を以て土御門殿に於て神器を後小松天皇に傳へられた、時に御年十六、紀元二〇五二年後醍醐天皇の遷幸より五十

七年間を経た。後二年後龜山上皇に太上天皇の尊號を上り、義滿は邑を献し又食邑をもとの吉野朝廷の公卿諸臣に贈つた。後小松天皇<sup>九代</sup>は後光嚴院の御孫である。

□整理 一、教科書の讀解。二、質疑應答。三、設問 (1)如何にして後龜山天皇は京都へ還幸せられたか。(2)後醍醐天皇吉野に還幸せられてより之まで何年を経たか。(3)此に五十七年間の兵亂治まりて民其の堵に安んずるを得しは誰の功か。

□全課の復習 (1)九州に奔りし尊氏は如何にして京都に入るを得たか。(2)後醍醐天皇は何故吉野に遷幸せられたか。(3)尊氏は賊名を避けんが爲何うしたか。(4)正成・義貞・顯家等歿後の官軍の形勢は何うであつたか。(5)京都の内訌に就いて語れ。(6)如何にして兵亂は治まつたか。(7)大覺寺統、持明院統の結末は何うなつたか。

### 第三學期分の復習 (二時間)

□要旨 北條氏滅亡し足利氏之に代るに至りし次第を復習するのである。

□教具 時代區分圖、天皇御系圖。

□復習要項 一、前學期分の續きとして剛健なる鎌倉時代の風俗・文・佛教・工藝・美術に就いて。

二、北條氏が承久の亂後皇位繼承に容喙するが如き、不臣の行動を取てし專横の行爲頗る多かりしも其の衰ふるに至り、後醍醐天皇の御討伐の御計畫となり、次で其の滅亡となり遂に建武中興の業を致したる次第に就いて。

三、建武の新政には弊政頗る多く且つ尊氏の野心の爲再び其の業やぶれ、勤王の諸將前後に斃れ天皇吉野遷幸となりし次第に就いて。

四、官軍一時振ひしも遂に衰へ京都亦内訌を生じたるが、義滿に至り遂に京都還幸となり戰亂此に治まりし次第に就いて。

### 第一より終りまでの大要の復習(二時間)

□要旨 我が建國の初めより、皇威の振興と世運の進歩の時代を経て大化の改新となり、奈良時代、平安時代を経て鎌倉時代の武家政治の世となり、建武の中興によりて一時政権朝廷に復したるが、再び足利氏の武家政治となるに至りし次第の主要を復習するのである。

—〔高等第一學年用〕—

國民性の陶冶を  
基調としたる  
**歴史教授日案(高一)**

大正九年十月一日初版印刷  
大正九年十月五日初版發行

歴史教授日案(高一)

定價金貳圓參拾錢

不許	檢印	復製
----	----	----

著者 富士徳治 増 澤 淑郎  
 發行者 東京市京橋區入舟町五丁目三番地 藤原惣太郎  
 印刷者 東京市京橋區新榮町五丁目二番地 岩本菊雄

發行所

東京市京橋區  
入舟町五丁目

明治圖書株式會社

振替東京一八五二三番  
電話京橋二〇〇三番  
五〇〇四番

(新榮印刷會社印刷)

**最新教授用日本歷史地圖**

(版十第)

紙各幅(縱三尺六寸、横二尺六寸)全貳拾圓 定價金貳拾五圓

第一圖	東京高等師範學校
第二圖	東京高等師範學校
第三圖	東京高等師範學校
第四圖	東京高等師範學校
第五圖	東京高等師範學校
第六圖	東京高等師範學校
第七圖	東京高等師範學校
第八圖	東京高等師範學校
第九圖	東京高等師範學校
第十圖	東京高等師範學校
第十一圖	東京高等師範學校
第十二圖	東京高等師範學校
第十三圖	東京高等師範學校
第十四圖	東京高等師範學校
第十五圖	東京高等師範學校
第十六圖	東京高等師範學校
第十七圖	東京高等師範學校
第十八圖	東京高等師範學校
第十九圖	東京高等師範學校
第二十圖	東京高等師範學校

東京高等師範學校助教 齋藤斐章先生校閱  
 東京高等師範學校調導 肥後盛隆 考案  
 高師附屬(自尋常五年教室壁上備附)  
 歷史研究部(至高等二年教室壁上備附)

**小學歷史時代區分圖**

(版五第)

布製軸仕立 全壹圓 實價金貳圓也

◎縱約八尺 橫二尺 石版數度印刷鮮明頗美麗

尋常科及び高等科に於て使用する、歴史年代の區分及び命名法に就ては、其說區々にして多く疑問に附せられしを、茲に考案せられし兩先生は、深き蘊蓄と、實際の經驗とに基づき、國定教科書を柱として、之を取扱ふに都合よき様、各時代を區分し、其名稱も成るべく教科書に用ひたるものを採用し、加ふるに重要な紀元年數、及び、歴史的事項を記入し、以て一目瞭然たらしめたり、乞ふ速に小學上級各學年教室に備附せられんことを。

前文部省國定教科書編纂委員京都市視學 上田 代吉  
京都府師範附屬主事 小山 保雄合著  
京都府女子師範附屬主事 鹽見 靜一

教育批評の要訣

四六版美裝全壹冊 定價金壹圓廿錢

本書は著者が多年師範教育及び小學教育に従事して得たる經驗を經とし最新の學說然も堅實なる學理的論據を轉として編述したるものなり。  
準備なき參觀は無効なり苟も教育教授の批評を試みんとするものは先づ本書を讀め。  
徹底せる教育充實せる教授をなさんとする者は先づ本書によつて其の眞髓を會得せよ。  
本書は實に研究に忠實なる小學教師諸君並に師範學校上級生諸君の好伴侶なり。

青年教育研究會編

農村補習讀本

上卷 定價四拾錢 中卷 定價四拾五錢

取纏め御注文は割引致候  
趣意……趣味と實用  
一從來行はるゝ補習讀本は之れを實際に使用して材料多きに失し取扱上甚だ困難なり本書は其の缺陷を補はんが爲めに編纂せり。  
一本書の材料は教育に關する勸語の趣旨に基づき國民生活の諸方面に素め其の行文は平易にして國語の模範となり且一般青年の心情を純正快活ならしむるものを執れり。  
一本書は上中下の三卷に分ち上卷を尋常小學卒業程度中卷を二ヶ年の高等小學卒業程度下卷を三ヶ年の高等小學卒業程度とし各其學習に適せしめんことを期せり。  
一本書は業間又は夜學に於て一ヶ年間約拾週を教授し得べきものとし毎週二回一回約二時間の豫定を以て編纂したり。  
一本書は各課の終りに説問を掲げ自學の念を強からしめんことを務めたり。

法學博士 高田早苗題  
東京少年團長 伊崎良照序  
陸軍少將 西村乙吉著  
法學士

列強模範青年團

四六判洋裝二百五十頁、定價金一圓

目次大要

- 第一章 獨逸青年團
- 第二章 英吉利青年團
- 第三章 佛蘭西青年團
- 第四章 露西亞青年團
- 第五章 伊太利青年團
- 第六章 埃地利青年團
- 第七章 瑞西青年團
- 第八章 亞米利加青年團
- 第十章 歐洲大戰亂と、各國青年團の活動狀況。

「前」岡田文相、後藤内相、田所次官題序  
「理想の村」著者 石田傳吉著

農村模範青年讀本

和製上製全二冊、各冊百三十餘頁  
尋常卒業程度用 金五十五錢  
高等卒業程度用 金五十五錢

- 青年團體指導に關する、兩大臣の訓令に基き出でし理想的青年讀本。
- 國民農業教育、自治教育の三大主義に基いた教育理想的青年、讀本。
- 普通の補習教科書と、全然色彩を異にせる本書。
- 熱烈なる本文あり。自習資料あり。日用書簡文あり。祝辭答辭文例、英語便覽等、異彩を放てり。

文部省督學官 小泉又一校訂  
東京高師附屬訓導 中島錦三郎著

### 實 驗 複 式 教 授 法

四六版洋裝 全壹册 定價金一圓

### 滿 卷 悉 こ く 教 壇 上 の 研 究 物

著者は曩に東京高等師範學校附屬小學校訓導として實地教授に従事し令名を馳せ殊に専ら同校二部において複式教授の研究に全力を傾倒せられしが先年氏の郷里小學校に轉じ廿餘學級を経營し特に複式教授の蘊奥を研究せらる。本書は即ち其結晶物なり。本會茲に於て氏に請ひ廣く世に紹介することとせり。乞ふ羊頭を掲げて狗肉を賣る一夜作りの書物と同一視する勿れ。切に内容の一讀を奨む。

女子教育の龜鑑!!  
又と得難き珍書は即ちこれ!!

東京帝國大學 文學博士 中島力造先生序  
文科大學教授 三輪田眞佐子女士序  
三輪田高等女學校校長 三輪田眞佐子女士序  
明曆二年京都學問所御編纂

### 原 本 女 四 書

菊版洋裝 清裝全一册 定價六拾五錢  
總振假名附

本書は明曆二年後西院天皇の御宇京都學問所に於て女孝經・女論語・内訓・女誡の四書を女四書として天下の碩學に命じてこれを假名交り文に譯せしめ廣く海内女子教育に資せられたる原本なり。

### 大 次 目

◎本書の跋に曰く  
女孝經・女論語・内訓・女誡の四書は閨門萬世の龜鑑なり。故に諺解梓行して遍く宇内に布くと云爾  
時明曆二丙申年春季春穀且

▽昭憲皇太后唯一の御愛讀書△

京都府女子師範學校附屬小學校編纂

### 模 式 的 教 材 を 中 心 と し た る 各 科 教 授 の 研 究

尋常小學第一、二學年用 金七十五錢  
尋常小學第三、四學年用 金七十五錢  
四六判洋裝箱入全二册、紙數各二百五十頁

- 本書は京都府女子師範學校附屬小學校に於て、多年の研究になれる教授の實際案なり。
- 本書は各教科につき、最も研究を要する模式的教材に關する、教授の實際を主として採擇せり。
- 本書は忠實熱心なる訓導諸君、特に師範學校教生諸君の好參考書なり。

東京教育水泳部 中川 亨著

### 實 驗 水 泳 教 授 法

四六判美裝全一册 定價金五十五錢

- 第一章總論—第一節水泳の教育的價值、第二節浮力の研究
- 第二章水泳法の區別
- 第三章實際論—第一節水泳法の順序、第二節横體の泳ぎ方—第三節平體の泳ぎ方、第四節立體の泳ぎ方—第七節各種游泳法の長短第八節跳込法—第九節潜水法
- 第四章水泳科教授上の注意
- 第五章水泳と遊戯
- 第六章水泳場の設備



愛媛縣師範 山路一遊序  
學校 長 渡部月華著

家庭教育 通俗講話 慈愛の泉

四六判美裝箱入 全一冊 定價金一圓

- 家庭教育は慈愛を以て其の源泉とする。天下の父母誰とて其の子を愛せぬものはない。
- 併しながら、愛して、其の道を得ないが爲めに、思はしからぬ結果を生ずるのが、世の常態ではあるまいか。
- 本書は固より一小著に過ぎないけれども、之世をの父母たる人々の座右に進めて、聊か其の眞の愛情に伴ふべき、其結果を生ぜしめたいものとの考へより出たものである。

東京高等師範 廣田惠之助序  
學校訓導 國語研究會編

高等小學 國語教授の實際

菊判洋裝全二冊、紙數約百七十頁  
高等第一學年前期用 金五十五錢  
高等第一學年後期用 金五十五錢

- 本書の六特色
- 形式方面を特に重視し、専ら實用的を旨とせり。
- 主要なる文の解剖を附し、參考の便に資せり。
- 内容中の主要點をあげ、簡明正確に解釋せり。
- 語句の解釋は平易適切簡にして要を得たり。
- 語法は専門的煩を避け専ら常識本位とせり。
- 修辭上至便なる注意を與へ、文段を明示せり。

徳川達孝伯序 辻 新次男序  
中島文學博士校 加藤咄堂氏跋

模範講話 名家演說集

菊判美裝全一冊、總クロス箱入  
紙數四百五十頁 定價二圓五十錢

- 六大種目綱領
- 第一章 一般的社會合講話資料
- 第二章 青年會講話資料
- 第三章 婦人會講話資料
- 第四章 父兄母姉會講話資料
- 第五章 通俗講演會講話資料
- 第六章 在郷軍人會講話資料

- 講 師
- 水野、田中、阪谷、田尻、各法學博士
  - 芳賀醫學博士、横井農學博士
  - 中島、建部、三宅、井上、元良、文學博士
  - 鳩山、加藤、下田、棚橋、嘉悦女史等

日本文藝協會編纂 (全二冊)

傑作 文壇の花

三六判天金箱入各五百頁、洋裝美本  
定價各金一圓也 (第一編、第二編)

- 現代文豪の各篇佳作四十餘種を蒐めて一ポケットに收む。
- 恰も花紅葉の美を一盆栽に移し植えたるが如し。
- 左右より眺むるも可なり。床上に卓上に飾るもよし。
- 然り而して、之を燈光の下に緋くに及んでは、情緒動き、知囊充ち、意識緊りて感興の自然に湧起するを禁ずる能はざらむ。
- 趣味津々とは蓋し此謂ならんか。
- 眞に滿天下諸君の模範文教科書として、實に好伴侶なり、敢て江湖の一讀を奨む。

東京高等師範學校訓導 水戸部寅松校訂  
前東京高等師範學校訓導 中島錦三郎共著  
京都府博明小學校訓導 今川仙之助共著

法令 基礎 小學校行事の研究

四六判洋裝箱入、定價金一圓廿錢

□本書卷頭——水戸部氏の語に曰く、

……今兩氏多年研鑽實施の績を録して、世に公にせらるゝに方り、余に校訂を求めらる。……之を諾して、審かに其校を見るに、章節皆是れ實地經驗の結晶で、校事改善の指鍼、學校教育と家庭及び社會教育を融合渾一せしむるの方法、一切の行事を秩序整然と説き盡して餘蘊がないのである。……斯界に向つて確かに多大の寄與貢獻を齎らすものたるを信じて疑はないのである。

東京高等師範 蘆田惠之助序  
範學校訓導 原田千之著

通俗講話の理論及實際

四六判洋裝箱入、定價金一圓

□本書卷頭——蘆田氏の序に曰く、

……本書は原田君が多年銑鍊に銑鍊を重ねて、所々に説話を試みたあとを、さながらにと記述したものである。余は原稿に於て之を通讀したが、言々句々原田君の響があつて、自ら人をひきつける。讀み行くうちに、知らず／＼涙の湧く所あり、笑の禁じ難き所がある。かつ氏獨特な洒脫の氣分にあちて、しかも要點が痛切なほど鮮明なのは、獨り氏にのみ望まるゝ著書である。……我も亦君を仰いで、説話の材料とその方法を學ばう。

手紙雜誌主筆 桑田春風著

千山 萬水 旅からの手紙

四六判美裝箱入全一冊、コロタイプ手刷  
紙數三百餘頁、定價金一圓

- この書題して「旅からの手紙」といふ。これを約すれば、所謂旅信の集也。
- 千山萬水、春夏秋冬、家郷をよその、旅にありて、隨所にこれが見聞を叙し、
- 隨時に之れが感想を抒べて、遂にその家族、親朋に寄せたる手紙を收む。
- 其の多くは、明治、大正一に於ける名家、鉅匠の手になれるものなり。

内藤千代子序、上原綾子著

薔薇一輪

四六判美裝全一冊、洋裝石版刷  
紙數二百四十頁、定價金六十錢

- 世人の記憶に、まだ新たであらう、女の彩筆……。
- 文名は女學世界誌上に、一時鋒々たるものであつた。
- 本書は女史の才筆になれる、情趣深き單篇につき、其の遺稿を取集め、記念としてこの度出版したものである。
- 一讀讚嘆、……散りゆく花、ムーンライト、ソナタ榮えゆく春、女學生の日記、二もとの花等……目次十數項。

日本文藝協會編纂

大傑作美文集

三六版洋裝美本箱入全一冊  
紙數一千餘頁、定價一圓四十錢

□高尚の文學の精粹は收めて本書中にあり。各大家の短篇數百種を掲げ、讀者をして、眞に感興の湧出するを禁ぜざらしむ。

□書中芳賀文學博士、徳富蘇峰氏、大町桂月氏、徳富蘆花氏、尾崎紅葉氏、高山樗牛氏、夏目漱石氏、大西祝氏、土井晩翠氏、櫻井忠温氏、島崎藤村氏等一流名士の短文をあげ、一つの模範文教教科書たらしめんとして編纂されたものである。

十五博士講演、通俗教育會編

現代通俗講演集

菊判洋裝箱入上製全一冊、四百五十頁  
定價金二圓

□通俗講演集成る、蓋し現代に必要な諸會合の演説講話の資料たらしめんと期するものなり。

□或は座談とし、或は「テーブル、スビーチ」として大方の急需に應じて適切なるものといふべし。

目次大要

- 一、壇上より諸君へ、
- 二、壇上より青年へ、
- 三、壇上より婦人へ、
- 四、壇上より家庭へ、(其一)
- 五、壇上より家庭へ、(其二)
- 四、壇上より軍人へ、

佐賀縣師範 山田秀作 共著  
學校訓導 久原忠太

尋常小學綴方模範文例

四六判美裝全一冊、背クロス金文字入  
紙數約四百頁、定價金一圓

□文題の適否は、一に綴り方教授上死活の分岐點たり。本書は著者が師範學校に於て、綴り方教科の主任として、尋常小學校各學年に亘り、實際に研究實施せし結晶物たり。

□滿天下同好研究家諸君の批正を仰がんとす。

□實にこれ、兒童本位の最新最良書たり。……敢て江湖に薦む。

佐賀縣師範 久原忠太著  
學校訓導

高等小學綴方模範文例

四六判美裝全一冊、背クロス金文字入  
紙數三百頁、定價金一圓也

□本書は實際的研究の良書として、江湖の歡迎を博せし「尋常小學綴方模範文例」の姉妹篇として、世に生れたるものなり。

□本書收むる所、高等第一、二學年、何れも各學期に亘り、詳細なる實際的徳目の下に、百餘種の文題を撰定し、兒童を立場としての模範文を滿載せり。

東京高等師範學校訓導 安東壽郎校訂  
東京高等師範學校訓導 肥後盛熊校訂  
修齊式算術主唱者 足立龜次郎著

教科書を縦に見たる  
**算術教授の新研究**

菊判上製箱入洋装全一冊、五百餘頁  
定價金三圓

- 著者は京都修齊小學校長にして、算術教授に熱中せらるる事茲に十五年。
- 而も全力を傾倒して、本科の改善進歩を計り、其の成績の顯著なるは、今や一般の認識する處となり。
- 地方視察員は著者の下に踵を接し、何れも其の効果の優秀なるを、驚嘆せざるものなし。
- 乞ふ眞面目なる著者の研究により、大方諸君の批正を仰がんことを。

教育調査會編纂(文部省令第  
十四號準據)

通俗  
**小學家事教授書**

菊判洋装箱入全一冊、二百五十頁  
定價金一圓

- 本書は文部省第十四號を以て、教則の改訂を發布せらるゝと共に、直ちに教授細目の編制を命じたるも適當の參考書に乏しきを以て、教授上の缺陷を感ずること尠なからず。
- されば研究部に囑託して、原稿を作らしめ、調査會に於て、更に委員を選定して、周到なる調査を施して、愈々茲に出版せしものなり。

兵庫縣高砂小學校長 廣田虎之助著

**實質算の教授と其教材**

菊判洋装全一冊、總クロス箱入  
紙數六百二十頁、定價三圓五十錢

- 著者は曩に、聚樂式算術教授法を立案して、令名を斯界に博し、以て本科教授の革新を促すや切なり。
- 爾來滿七ケ年間、更に應用問題と其の教授法につきて、精察研鑽、茲に幾多の疑問を解決して、遂に本書を成すに至れり。
- 氏は實に、一山の開祖、精力主義の權化……大正七年遂に逝去せられた。該二著は氏死して後尙ほ永へに世に宣傳せられつゝある。

兵庫縣高砂小學校長 廣田虎之助著

聚樂式  
算術教授法の  
**主張と生命**

四六判洋装全一冊、總クロス箱入  
紙數四百數十頁、定價金一圓廿錢

- 氏は算術教授研究の結果、全国各地に出張招聘に應じ、講演せる事、實に二府十五縣八十三郡市の多きに達す。
- 本書は其結晶の成果なり。
- これ算術科教授の根基となるべく、理論の概要を發表せるものにして、各編、各章、各項、何れも多年の研究に屬し、根據あるものなり。
- 本書によつて其初め、聚樂式算術教授法が、賛否の聲喧然たる昔を偲び、氏の過去に於ける努力の跡を歴然たらしむ。

東京高等師範學校訓導 後藤胤保著

(本合) 尋常小學各學年算術新教授書

菊判上製總クローズ、箱入全一冊  
紙數一千數百頁、定價金三圓五十錢

- 後藤先生が職を東京高等師範學校附屬小學校に奉じ専ら算術教授に熱中せらるゝ事滿二十餘年。
- 其の間不撓不屈の研究録は今や山積せり。先生曰く「教授の方法を研究せんには、先づ其の教材に精通せざるべからず」と。
- 言簡なりと雖も、抱負謙見や大なりと言ふべし。弊社茲に先生に乞ひ、愈々小學校各學年に互りて、先生の蘊蓄を傾倒せらるゝことゝなれり。
- これ蓋し、我國初等教育界に取りての幸福に外ならず。

東京高等師範學校訓導 後藤胤保著

(本分) 算術教授の實際

尋常一年教師用金六十五錢 同二年用金六十五錢  
尋常三年教師用金六十五錢 同四年用金六十五錢  
尋常五年教師用金六十五錢 同六年用金七十五錢

- 小學校各學年新學期は來れり。
- 各學級擔任諸君の、本科教授上缺くべからざるものは本書なり。
- 諸君は本書によりて、兒童の實力を養成し、能力を發展せざるべからず。
- 今や全部完成せり。分本を任意發賣す。

名古屋市視學 野地清學、高井彌吉著

尺度とコンパスにて解説し得る 新主義算術

四六判美裝箱入全一冊、木版數十個入  
紙數二百六十頁、定價金九十錢

- 算術教授法改善の第一聲現はれたり。
- 我が國最初の新主義算術書出でたり。
- 應用問題の如きも一、二の直線を以て解き得。
- 新主義算術の特徴とせる教材教具は何か。
- 戦後實現せる算術教授は抑々何ぞ。
- 問題は最新にして獨創的解法亦明快なり。
- 實驗實用を算び、問題構成を重んず。
- 器械的語記主義の舊慣を打破せる……本書の特色を見よ。

東京高等師範學校訓導 後藤胤保校訂

自學自習算術あさらひの仕方

四六判美裝箱入全一冊、定價一圓五十錢

- この本は皆さんが、家で算術の御けいこなさる時、よい先生となり、よい友達となる爲に出來たものです。……これ本書である。
- 自働主義教授の良書。
- 自學自習用の良書。
- 最新研究の良書。
- 實力養成の良書。
- 家庭自習用の良書。
- 能力發展の良書。
- 算術科の成績難を詫つ人は、本書に來りて、其の缺點を補ふべし。

滋賀縣女子師範學校主事 杉上長造 共著  
滋賀縣女子師範學校訓導 岡田重次郎

### 尋常小學國語書方新教授書

菊判和裝全一冊、木版五十餘箇入  
紙數百五十頁、(以下續刊)  
△尋常科第一學年教師用 金七十錢  
△尋常科第二學年教師用 金六十錢

□新書法主義の宣傳!!

□小學校書方科教授難の聲は、本書によりて解決せらる。

□本書は著書が、多年本科の實際的研究によりて、創案したる新書法主義を基底として、編述したるものにして、現下の隋眠的書方教授廓清の良書たり。

教授法研究会編纂

### 修正尋常小學算術教授書

菊判洋裝全一冊、横組み美麗  
紙數百八十頁 (以下續刊)  
△尋常科第一學年教師用 金六十錢  
△尋常科第二學年教師用 金八十錢

□本書中最も力を入れたのは、教授の方法と其の注意の二項目である。

□更に新舊兩教科の比較と修正の要點、教材に對する一般的批評をも加へてある。

□蓋し時勢は兩者に對する比較研究を促がし、活用上の批判をも要求するからである。

□修正算術新教科書の教師用として廣く採用せらる。

東京高等師範學校 訓導科教授 田村虎藏著

### 新撰教育唱歌

第一集、第二集、第三集……以下續刊  
各冊定價金貳拾五錢

□新作唱歌教材要求の聲全國に充滿せる折柄、最も題材の兒童的な、教育的な、新撰唱歌教材は此に提供せられたり。

□此れ歌曲は東西の粹、歌詞は斯道の大家を網羅して愈々盛装せる新作唱歌集は、茲に續いて刊行せらるゝことゝなれり。

東京高等師範學校 附屬小學校 内唱歌研究部編纂

### 尋常小學唱歌筆記帳

四六判横綴六十餘頁 全一冊金二十錢

□尋常科第二學年以上、尋常第六學年迄の兒童用唱歌筆記帳であります。價も安く、全部最優良の木版彫刻で、極めて親切なる理想的の筆記帳であります。

□全國數千の學校は、毎新學期に取纏めて御採用を願つて居ります。

□多數御注文の節は、特に御紹介被下度候。

東京高等師範學校  
訓導兼教諭 田村虎藏著

### 尋常小學唱歌教授書

尋常一年教師用 金七十錢 同二年用 金七十錢  
尋常三年教師用 金一圓 同四年用 金一圓  
尋常五年教師用 金一圓卅錢 同六年用 金二圓卅錢

- 文部省編纂の「尋常小學唱歌」は現代唱歌教授界の重鎮なり。然も其の歌曲教授に困難なりとの聲は、今や我が國內に充滿す。
- 本書は實に此の困難を救ひ、其の理由を判斷し、且つ此の唱歌の使命を全からしめんが爲に出現す。
- 本書一度世に出づるや、實に江湖空前の歡迎を受く我國初等教育界の唱歌教授は爲めに一大刷新を來さん。

東京高等師範學校  
訓導兼教諭 田村虎藏著

### 尋常小學改訂音階圖

布製掛軸長サ四尺巾一尺 金一圓(石版刷)

- 小學校唱歌教授に音階圖なきは、恰も大洋を航する船に羅針盤なきが如し。兒童の音律養成には是非此音階圖を利用せざるべからず。
- 著者茲に顧る所あり。曩に此の種の音階圖を考案せられしが、其の後研究の結果更に改訂を加へ、此に刊行せり。
- 弊社即ち、可及的廣く世に使用せられ、其の普及を計らん爲め、茲に實費を以て頒たんとす。乞ふ速に一軸を需めて、現代我國唱歌教授界の缺陷を補はれよ。

京都市理科研究會幹事 池田榮三郎  
京都市手工研究會幹事 三好一 共著

### 理科應用兒童工作

菊判洋裝全一冊、寫眞凸版七十六圖  
金文字入清裝、定價金一圓四十錢

- 偏文教育を打破して、新教育を建設せんとするの教育家諸君。
- 兒童のために實驗工作室を開放して、課外に兒童の新樂天地を開拓せんとする校長諸君。
- 理科教育の刷新を促がし、兒童實驗の施設を完備せんとする訓導諸君。
- 戦は止み、干戈は收められたり。本書は實に此等の重き任務の下に生れ出たり。

教授法研究會編纂

### 尋常科理科教材の研究

四六判洋裝全一冊、定價金八拾錢

- 本書は、今回小學校令施行規則の改正に伴ひ、發行したるものにして、尋常小學第四學年の教材を選ばし。
- 教授要旨、準備、觀察要項、觀察實驗、教授上の注意等を、詳細に説述したる最新最良の書なり。
- 全國小學校教育家諸君は、本書を參照して、教授細目の最善を期せられんことを……敢て薦む。

宮中顧問官 中洲三島發著  
文學博士

三島博士 老子講義

菊判洋裝全一冊、總クローズ上製  
紙數三百餘頁、定價金二圓

- 本書中博士特撰の「老子私録」は下一品なり。
- これ實に畏れ多くも、博士が 明治天皇に御進講申上げしものなり。
- 眞にこれ百世に傳ふべき、不朽の寶典にして、社會の機微を洞察し處生の要道を悟了せんと欲する者は須らく本書に來りて、其の眞髓を會得せよ……切に一本を薦む。

教授法研究会編纂

文部省 新理科教授要綱

尋常科、四、五、六學年用、四六判全一冊  
洋裝美本二百七十餘頁二段組  
定價金一圓四十錢

- 如何なる方針によりて、如何なる教材を撰擇せられたるか。
- これ等教材は如何に排列せられたるか。
- 各教材は如何なる程度に、如何なる注意を以て教授すべきか。
- 本書は即ち是等の諸問題に對し、表解闡明したるものなれば、直に取つて各校の教授細目、教授書として、好參考書たらしむべく、刻下必備の最新良書なり。

東京女子高等 後閑菊野校訂  
師範學校教授 高橋時子著

文檢 家事要義

四六判美裝全一冊、背クローズ箱入  
紙數四百五十頁、定價金二圓

- 校訂者後閑先生は、實に家事科の柱石、而かも本書に對しては、一々叮嚀に加筆せらる。
- 著者はこれ、最優良の成績を以て本科に首尾よく合格せるの人。
- 本書は實に、吾が受檢の苦心に照合して、將來本科を受験せんとする方々の爲めに、完備せる併かも其内容充實せる、一大受檢準備書を提供せられたものである。

京都帝國大學 岡村 司校訂  
法科大學講師 北浦圭太郎著

國定教科書と帝國憲法

四六判美裝全一冊、背クローズ箱入  
紙數三百五十餘頁、定價一圓五十錢

- 我が教育界に、驚くべき一大缺陷あり。曰く立憲的思想の缺乏これなり。
- 著者茲に見る所あり。研鑽多年、本書遂に出でたり、曾て大阪市長會にて講演せしもの。
- 本書の内容は、國定教科書中に潜在せる、憲法的教材を、十大博士の諸説によりて、縱横自在に、研鑽討究せる結晶の成果なり。……敢て江湖に薦む。



教授法研究會編纂(尋一)

### 修正 修身新教授書

菊判和裝全一冊、紙數約二百頁  
尋常科第一學年用 金七十錢

- 本書は今回修正せられたる、尋常小學修身書卷一の實際的取扱ひに關し、教授用書として編纂せるものなり。
- 世には徹頭徹尾、教材を國定教科書にのみよらんとする者あるは、誤れり。
- 本書は説話要項の外に、教授上特に注意すべき要點を指摘したり。
- これ即ち本課の趣旨を徹底せしめんとする老練心に出でたるものなり。

教授法研究會編纂(尋一)

### 第三種 讀本準據 話方綴方新教授書

菊判和裝全一冊、紙數約二百頁  
尋常科第一學年用 金六十五錢

- 綴方教授を、實用的意味にのみ解した時代は去つて今や人格養成、人生との交渉といふ深い點に其價値を見出すやうになつた。
- 然るに未だ話方教授の價値を正當に解し、これをして國語科の重要な部分を擔當させ、綴方と結び付ける迄に、案を立てたるものは殆んどない。
- 本書は即ち、此の點を立脚地として、生れたものである。

三重縣女子師範學校主筆 關野榮共著  
三重縣女子師範學校訓導 三浦保行

### 兒童生活の尊重 算術教授の新建設

四六判洋裝全一冊箱入、定價金一圓廿錢

- 本書は、兒童心理の傾向と、數學發達の歴史とに鑒み、著者十數年實地研究の結果。
- 兒童生活の尊重と、實驗實測の重視とを標榜して、茲に生れたるものなり。
- 近時我數學教授界を覺醒せしめたる、新主義數學は本書の最も共鳴する所。
- 曰く具體的、曰く實驗的、曰く歸納的、而して兒童算術力の根本を培はんとするのである。

東京高師學校長文學博士 三宅米吉序  
京都府師範學校教諭 増澤淑著

### 伊藤仁齋と其教育

四六判上裝箱入全一冊、定價金一圓

- 著者、我一代の儒宗伊藤仁齋先生の研究に没頭すること多年、精察研鑽遂に其の教育法の眞諦を闡明して茲に一書を公にせらる。
- 滿天下の教育家、宗敎家、實業家諸君に敢て一讀を薦む。
- ……口給 伊藤仁齋古義堂の圖。
- ……伊藤仁齋論語古義草稿。
- 伊藤仁齋の肖像……伊藤家系譜。

東京帝國大學教授 保科孝一  
滋賀縣師範學校訓導 秋田喜三郎著

### 創作的讀方教授

四六判洋裝箱入全一冊、清裝優美  
紙數三百六十餘頁、定價金二圓

- 本書は著者が多年、實地研究の結晶で、創造創作の  
新見地に立ち、
- (一)新文章觀、(二)作者の想定、(三)讀解力の養成、(四)鑑  
賞的藝術的の取扱、(五)創作的取扱の實際、(六)自學態  
度の順致、(七)讀方考査法の革新。
- 等に亘つて、細に入り徹を穿つてゐる。
- 蓋し、世界改造後の國語教授は、本書によつて一新  
せられるであらう。

東京帝國大學教授 林博太郎序  
文部省事務官 乘杉嘉壽序  
滋賀縣師範學校訓導 田中金之著

### 自律高學年訓練の實際

四六判洋裝箱入全一冊、清裝優美  
紙數三百數十頁、定價金一圓八十錢

- 多年我教育界に欠陥を感じ、渴望を訴へたる、高學  
年の訓練書……愈々出づ。
- 高學年教育は、所謂仕上げの教育にして、其の徹底  
如何は、直に以て國民教育の如何に關す。
- 著者「高學年の訓練」研究に没頭する事茲に十有餘年  
精養研鑽遂に多大の疑問を解決して、本書をなすに  
至れり。
- 今や混沌たる我思想界に對して、有力なる宣傳の一  
助とやらならん……教育家諸彦に敢て薦む。

東京高等師範學校  
助教授兼訓導 北垣恭次郎選

### 小學地理かるた

石版五度刷堅牢優美箱入金九十五錢

- 世に少年少女用のカルタは少くありません。併し其  
の歌詞の味ふべきもの、優美堅牢なるものは、殆ん  
ど見當りません。
- 然るにこの「小學地理カルタ」及び「小學歴史カルタ」  
は悉く是等の要件を備へた理想的のもので、
- 歌詞の選者は、北垣恭次郎先生で、材料は我國の歴  
史及び地理に取り、先生特有の着眼によつて、
- 巧みに日本古來の人物、事件及び名所舊跡等を、詠  
み出されたものでありますから、(下段)

東京高等師範學校  
助教授兼訓導 北垣恭次郎選

### 小學歴史かるた

石版五度刷堅牢優美箱入金九十五錢

- 「カルタ」遊びの間に、知らず／＼有益な地理歴史の  
知識が得られます。
- 挿畫は伊藤醉美先生が筆を執られたもので、殆んど  
他に類のない、少年少女用の最良「カルタ」であると  
信じて居ります。
- 御家庭並に兒童圖書館に御求めになつて、高尚な  
「年々年中」地理歴史遊びの、娯樂用具の一つに、  
加へになることを御勧め致します。
- 敢て全國初等教育家諸君に推奨す。

教授法研究會編纂(類書中の白眉)

第三種 尋常小學 國語讀本 新教授書

- 卷一、尋常一年前期用 金六十錢
- 卷二、尋常一年後期用 金六十五錢
- 卷三、尋常二年前期用 金九十錢
- 卷四、尋常二年後期用 金九十錢
- 卷五、尋常三年前期用 金一圓十錢
- 卷六、尋常三年後期用 金一圓十錢

第七版

以下續刊(御注文の節御照介を乞ふ)

- 教材の要點に對し、明快なる文章解剖を施せり。
- 形式方面全部に對し、詳細なる敘述をなせり。
- 形辭法は著者の最も得意とする處、其の精細、妥當なる鑑賞批評は、蓋し本書独自の境。
- 實地經驗を基調とした、教授上の諸注意が全卷の大半を占めてゐる。
- 各課毎に必ず優秀なる應用文が添へてある。

女子作文の考へ方及文例

四六判箱入全一冊、定價金八十五錢

東京高等師範 蘆田惠之助序  
學校訓導 金子彦二郎著

文學博士佐々政一氏の本書に對する序文。

……「本書に對すれば、自分の信じてゐる所、傳へんとした所が、鮮かな具體的な形となつて、眼前に浮び出たやうな感がある。本書は固より君が天分と創意との結果であらう。併し自分にとつては、自分の暗示から生れ出たとさへ信ぜしむるものが尠くない。蓋し花木の花咲くは、花木の天賦である。……金子君よ、君の此の書を読んだ才女が、他日文壇の花と誇はれる日があるとすれば、君の其の才女に就て感ずる所は、亦僕の今日の所感の如きものがあるであらう」……。

東京高等師範 兒島獻吉郎校訂  
學校教授 金子彦二郎著

補習新漢文

菊判和裝全一冊、定價金四十錢

(版年九正大)

- 本書は尋常小學校六ヶ年の課程を修了したるもの、補習用漢文教科書として編纂したものである。
- 材料は、我國教育の源泉たる、「教育勅語」に初まり我國の史傳に及び、
- 忠至誠の愛國民的精神を鼓舞振作するに足るべき、傳記、教訓及び血涙の凝つて成れる、詩篇とを豊富に収録せり。

東京高等師範 兒島獻吉郎校訂  
學校教授 金子彦二郎著

補習新漢文參考

四六版洋裝箱入全一冊、定價金八十錢

(版年九正大)

- 本書は前記、各種實業學校、並びに補習學校教科書たる、補習新漢文の教師用書として編述したるものなり。
- 其内容は悉く、教育教授の上に記述し、殊に參考資料に至りては、あらゆる良書によりて調査し、親切詳細に認めたり。
- (一)要旨(二)語句の精細明快なる解説、(三)教授上の注意(參考資料)等至れり盡せりの教師用書である。

(大正九年版)

東京高等師範 諸橋徹次共編  
學校教諭 金子彦二郎

### 趣味の補習讀本

菊判和裝全三冊、寫眞版多數

- △上 卷、尋常卒業用 定價金五十五錢
- △下 卷、高等卒業用 定價金五十五錢
- △高程度、中學程度用 定價金六十五錢

- 本書は戰後民力涵養の五大要綱を參酌し、専ら世界的日本の國民的自覺、
- 並に生活準備と、我國特有の國民的情操、國民的精神の長養發揮とに、資すべき諸材料をば……
- 「趣味」の標的に照して之を精選した。
- 殊に「國民新常識語、ペン字書翰」……は其一例なり。

(大正九年版)

東京高等師範 諸橋徹次共編  
學校教諭 金子彦二郎

### 趣味の補習讀本參考

四六判洋裝箱入全一冊、定價金二圓

- 本書は前記、各種實業學校、並びに補習學校教科書たる、趣味の補習讀本(全三冊)の教師用書として、編述したるものなり。
- 其内容は悉く、教育教授の上に立脚し、上下各卷共に、著者自ら筆を執つて、左の諸項目を立て、
- 精細、且つ頗る懇切なる記述を、満載した教師用書である。蓋し教授者に取つて、絶大の便利を與へることであらう。
- (一)要旨—教授の主眼點—(二)段落—各節の大意—(三)語句の明快なる解説—(四)教授上の注意—參考資料

(大正九年版)

東京高等師範 互理章三郎著  
學校教諭

### 國民修身書

菊判和裝全三冊、紙數百餘頁

- △初等編、短期補習用 金五十錢
- △上 卷、長期補習用 金四十五錢
- △下 卷、同 上 金五十錢

- 本書は我が國民道德界の第一人者たる互理先生が、我が國民の思想界に於ける動搖混亂を默視するに忍びず、
- 茲に國民の青年子弟を教訓せんが爲に、特に執筆せられしものなり。
- 現時補習教育勃興の機運に際し、切に系統ある補習學校の修身教授を希望す。
- 滿天下教育家諸君に本書の採用を薦む。

(大正九年版)

東京高等師範 互理章三郎著  
學校教諭

### 國民修身參考

四六判五百六十頁箱入、定價金二圓五十錢

- 本書は互理先生が、其の高邁なる識見と、周匝穩健なる抱負とにより、前記國民修身書(全三冊)の教師用書として執筆せられしものにして、
- 鑒みるに歴史の成迹を以てし、參ずるに醇正なる學說を以てし、我が國民道德として、穩健中正、蓋しこれ金玉の文字なり。
- 世の初等教育家諸君、並に文檢受験者諸君、中等教育家諸君、
- 殊に國定修身書各要目を調査研究せられんとするの士に……敢て推奨す。

東京女子高等師範學校教授 富士德治郎 共著  
京都府女子師範學校主筆 増澤 淑

(科常尋) 改造後の世界を基礎としたる **小學地理教授書**

四六判洋装箱入全四冊、各三百數十頁  
△尋常科五學年用 金一圓五十錢  
△尋常科六學年用 金一圓八十錢

□富士教授、(外國の部)、増澤主事(日本の部)、兩先生の分擔執筆にかゝる、最新最良の小學地理教授書愈出づ。

□我が國初等教育界の地理教授は、これによつて革新されん。

□本書の六大特色

1. 本書は地理教授に際し、囚はれない教科書運用の要諦を示したものである。

東京女子高等師範學校教授 富士德治郎 共著  
京都府女子師範學校主筆 増澤 淑

(科等高) 改造後の世界を基礎としたる **小學地理教授書**

四六判洋装箱入全四冊、各三百數十頁  
△高等科第一學年用 金二圓三十錢  
△高等科第二學年用 金二圓 圓

2. 本書は著者多年の經驗を基調とし、實際生活の見地より其の記述を多くした。

3. 本書は前項の意味に於て挿畫の解説には、多大の研究と、實地調査の努力とを費した。

4. 本書は生業に重きを置き、殊に産業發達の現狀を示す點に於て大いに努めた。

5. 本書は最近政府發表の統計、官制の改正、人口統計等によつた。

6. 本書は各巻劈頭に、一目瞭然たる銅版彫刻の最新世界地圖を挿入してゐる。

東京女子高等師範學校教授 富士德治郎 共著  
京都府女子師範學校主筆 増澤 淑

(科常尋) 國民性の陶冶を基調としたる **歴史教授日案**

四六判洋装箱入全四冊、各三百數十頁  
△尋常科五學年用 金一圓八十錢  
△尋常科六學年用 金二圓三十錢

□従來行はれて居る歴史教授書は、概ね該事實の詮索か若くば乾燥無味なる、史實の羅列に過ぎない。

□故に専門家ならざる教育家にとりては、多大の困難を感じたのであつた。

□今や世界大戦亂も全く收まり、動もすれば國民性の動搖を來さんとする時に際し、

□萬世不易の我が國體を擁護し、(下段)

東京女子高等師範學校教授 富士德治郎 共著  
京都府女子師範學校主筆 増澤 淑

(科等高) 國民性の陶冶を基調としたる **歴史教授日案**

四六判洋装箱入全四冊、各三百數十頁  
△高等科第一學年用 金二圓三十錢  
△高等科第二學年用 金二圓三十錢

□國民的志操を養成せんことは、歴史教授の最も重大なる任務と言はねばならぬ。

□本書はこの見地に立ち、兒童の心理を出發點として歴史教授を如何に高調すべきかを、日案的に起稿したもので、

□教授者は一つの参考書を要せずして、直ちに教壇上に立ち得るのである。

□ 實際的研究になれる結晶、理科教師の最大福音。  
宮城縣視學官・神方弘毅序  
宮城縣女子師範學校主事神野茂治郎校訂  
宮城縣女子師範學校訓導長玉澤正吉、村山貞之助共著

(尋常四年)

新定 理科教授精義

四六判洋裝全一冊、三百餘頁寫真凸版木板六十餘個入。

- 尋常四學年教師用 金二圓
- 尋常五學年教師用 金二圓三十錢
- 尋常六學年教師用 金二圓五十錢

- 最新要目に準據したる尋常四學年最初の理科教授精案。
- 眞驗觀察を主とし、時代の新要求に適應せる、新理科教授の實際案。
- 六十有餘の、寫真版、凸版、木板を挿み、懇切丁寧に解説せる、絶好の新研究書。

□ 卒先して新要目に據りて理科を教授し、改正令の本旨に副はんとする學校は必ず本書を備へよ。

□ 最も適切なる教材解説と、取扱法の精案を知らんとする熱心なる教師は、必ず本書を讀め。

□ 最新要目に準據したる、各學年理科新教授細目を編成せんとする學校は、必ず本書を備へよ。

□ 多くの挿畫により、明快精細なる指針を得て、直に教壇上に活用せんとする教師は、必ず本書を見よ。

□ 本書は尋常科各學年の、理科教材は如何に配當すべきを示し、併せて教授細目をも載せたり。

□ 本書は各教材に互り參考資料を掲げ、卷末に初學年理科教授上の注意を説示し、適切にして、信據すべき羅針盤たらしめたり。……類書中の最高權威。

2636  
60

十一

終

